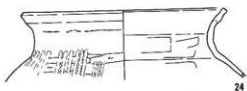
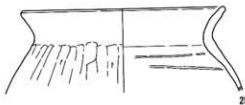


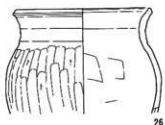
第111图 第141号住居跡出土遺物(1)



24



25



26



27



28



29



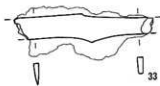
30



31



32



33



第112図 第141号住居跡出土遺物(2)

第41表 第141号住居跡出土遺物観察表 (第111・112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.4	4.9	—	180.4	80	群東		普通	にぶい黄橙		
2	土師器	坏	(11.8)	3.1	—	33.5	15	埜北	雲、針	良好	褐灰		
3	土師器	坏	(11.8)	3.5	—	43.7	20	埜北		普通	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	10.9	3.8	—	58.6	30	柳南		普通	にぶい黄橙	口縁部に壊か	
5	土師器	坏	11.5	3.8	—	98.1	60	柳南		普通	橙		165-1
6	土師器	坏	10.3	3.1	—	59.2	55	群東		普通	橙	カマド	
7	土師器	坏	10.8	3.4	—	63.2	70	埜北		普通	にぶい橙		
8	土師器	坏	10.9	3.2	—	52.5	25	柳南		普通	浅黄橙	内面黒色処理か	
9	土師器	坏	10.5	3.1	—	68.7	70	埜北		普通	橙		165-2
10	土師器	坏	11.0	3.8	—	79.0	50	群東		普通	橙		165-3
11	土師器	坏	(12.9)	3.5	—	91.7	50	群東		普通	橙		
12	土師器	坏	(12.8)	3.9	—	53.6	20	埜北		普通	橙		
13	土師器	坏	13.8	5.0	—	166.2	95	群東		普通	橙	外面黒斑	165-4
14	土師器	坏	14.6	4.3	—	144.4	50	柳南		普通	橙		165-5
15	土師器	坏	13.0	3.4	—	56.5	35	柳南		普通	橙		
16	土師器	坏	—	—	—	10.8	5	柳南		普通	橙	木葉痕	
17	土師器	甕	21.6	27.0	—	1032.5	60	埜北	雲、角	普通	橙	カマド左袖構築材	208-1
18	土師器	甕	20.2	20.1	—	1022.7	45	埜南	角、針	普通	にぶい黄橙	カマド右袖構築材	184-6
19	土師器	甕	(23.4)	7.0	—	127.0	10	埜北	角、針	普通	橙		
20	土師器	甕	(20.6)	7.3	—	157.9	10	埜北	角	普通	橙		
21	土師器	甕	(18.9)	14.1	—	331.0	20	群東	針	普通	橙		
22	土師器	甕	(20.8)	11.1	—	155.5	15	佐野	角	普通	橙	掘り方	
23	土師器	甕	(20.8)	6.4	—	140.9	5	埜北	雲、角	普通	にぶい黄橙		
24	土師器	甕	(21.3)	7.5	—	117.3	10	埜北	角	普通	にぶい黄橙		
25	土師器	甕	(21.0)	9.0	—	161.7	10	茨西	角、針	普通	にぶい黄橙		
26	土師器	甕	(14.2)	11.0	—	205.5	10	茨西		良好	灰黄褐		
27	土師器	甕	—	8.7	6.4	257.5	20	新治	雲	普通	赤褐	木葉痕	
28	須恵器	甕	—	7.2	—	123.5	5	南比企		良好	オリーブ黒		
29	須恵器	甕	—	8.1	—	380.8	5	湖西		普通	灰		
30	須恵器	甕	—	4.6	—	88.0	5	湖西		普通	灰		
31	須恵器	甕	—	4.2	—	108.0	5			普通	灰		
32	鉄製刀		長2.4幅4.2厚4.2重24.4									5孔、被熱	238-1
33	鉄製品	刀子	長(7.3)刀幅1.2背幅0.3重25.4										237-2

住居跡より新しい。南東コーナーが調査区域外におよぶほか、カマドを含む住居跡北側が第139号住居跡に壊される。

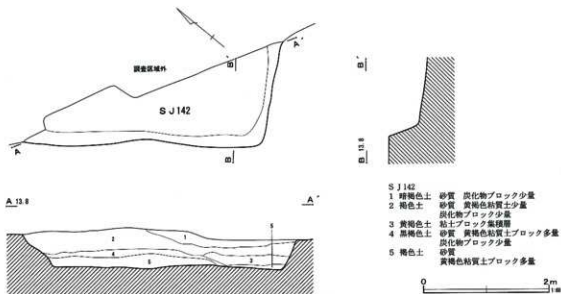
平面形は南北に長い長方形で、主軸方向はN-0°である。規模は東西軸4.5m、南北軸5.24m、確認面からの深さ0.47mである。

カマドは北壁中央に設けられ、袖部は右袖のみ残存していた。構築土に黄白色粘質土(23層)が用いられ、壁からの残存規模は49cm、床面からの残存高は8cmである。然焼部は床面より10cmほど低く掘り

窪められ、中央は被熱し赤変している。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴、および柱穴が確認されている。貯蔵穴は北東コーナーで検出され、平面形は東西に長い長円形で、規模は長軸86cm、短軸67cm、床面からの深さ33cmである。

柱穴は4基確認され、いずれも床面で検出することができず、20-30cmほど掘り下げた高さで確認した。それぞれの平面形および規模は、P1は円形で25×24cm、床面からの深さ35cm、P2は楕円形で22×16cm、床面からの深さ31cm、P3は円形で19×17



第113図 第142号住居跡

cm、床面からの深さ36cm、P4は円形で33×29cm、床面からの深さ44cmである。

遺物は、貯蔵穴から1・2の土師器坏が出土したほか、覆土から土師器坏・甕・壺、須恵器坏や貝巢穴痕泥岩が出土している。出土遺物から、時期は7世紀末から8世紀第I四半期に位置づけられる。

第147号住居跡 (第121・122図)

調査区南東側、H-5・6グリッドに位置する。第132・133・151・247・249号住居跡、第9b・9c・12号溝跡と重複し、新旧関係は溝跡よりも古く、いずれの住居跡よりも新しい。第9b号溝跡には、住居跡床面と北西コーナーを壊されている。

平面形は不整形で、主軸方向はN-10°-Wである。規模は長軸5.86m、短軸5.63m、確認面からの深さ0.38mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、主軸方向はN-2°-Wである。両袖が確認され、右袖は先端部に土師器甕(11)を倒立させて補強材としていた。土師器甕は胴部上半が残るのみである。構築土には灰褐色砂質土(16層)が用いられ、壁からの残存規模は左袖52cm、右袖は補強材を含めて65cmである。

燃焼部は壁内に収まる構造で、底面は構築時と最終機能時の2面を確認した。

構築時の底面は床面とほぼ同じ高さであり、煙道

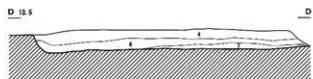
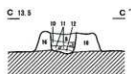
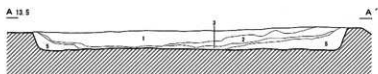
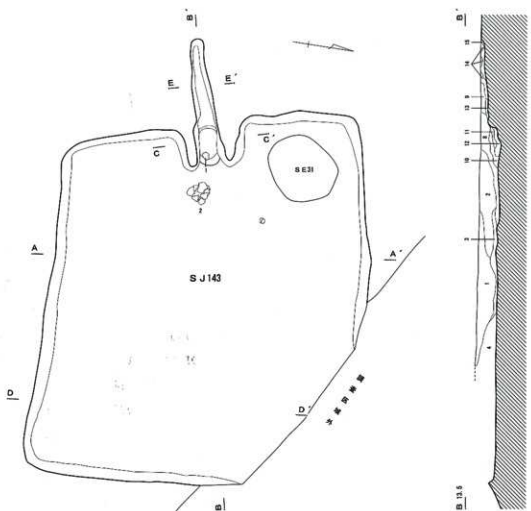
部とは10cm以上の明瞭な段差をもつ構造である。最終機能時の底面はこれより10cmほど高く、構築時の底面に灰色系砂質土(14・15層)が堆積した後にこれを火床面とした。規模は焚口幅67cm、奥行77cmである。煙道部は若干の凹凸をもち、外側へ傾斜しながら壁外へ130cm延びる。

遺物は、カマド近辺で集中して出土している。燃焼部では、土師器甕と1の土師器坏が出土している。土師器甕は胴部上半を欠いており、伏せた状態で出土した。天井部崩落土より下位で出土していることから、カマド機能時にはこの位置に据えられており、支脚として機能していた可能性がある。また、カマド構築時の底面からは10cmほど浮上した、14・15層上で出土していることから、この面が燃焼部底面となっていた段階での支脚と捉えることができよう。1の土師器坏はこの支脚に被さるようにして出土している。

出土遺物は、カマド袖補強材として11が出土したほか、床面や覆土から、土師器坏・甕、須恵器高坏や貝巢穴痕泥岩などが出土している。特に焚口付近での出土が目立ち、10や12の土師器甕が出土した。

時期は、カマド袖補強材などから、7世紀末から8世紀第I四半期に位置づけられる。

第148号住居跡 (第123・124図)

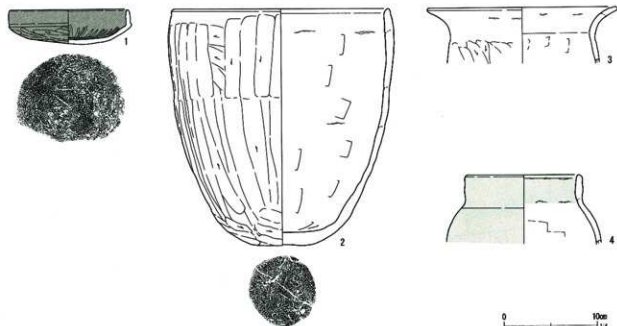


S J 143

- | | | | |
|--------|---------------------------------|----------|-------------------------|
| 1 灰褐色土 | 砂質 黄褐色粘質土ブロック少量
焼土粒子微量 炭化物少量 | 9 黄灰褐色土 | 砂質 焼土ブロック少量 |
| 2 灰褐色土 | 砂質 黄褐色粘質土ブロック少量 | 10 暗灰褐色土 | 砂質 焼土ブロック・炭化物多量 |
| 3 灰褐色土 | 黄褐色粘質土ブロック多量 | 11 暗灰色土 | 砂質 |
| 4 黄褐色土 | 砂質 炭化物微量 | 12 暗灰色土 | 灰黄粘質 焼土ブロック多量 |
| 5 黄褐色土 | 砂質 炭化物微量 | 13 褐色土 | 焼土ブロック多量
(天井崩落土) 埋込部 |
| 6 暗褐色土 | 炭化物少量 | 14 暗灰褐色土 | 砂質 焼土少量、炭化物多量 |
| 7 明褐色土 | 炭化物少量 粘性強 | 15 褐色土 | 砂質 |
| 8 灰褐色土 | 砂質 炭化物粒子微量 | 16 黄灰色土 | 粘質土 カマド袖 |

0 2m
1m

第114図 第143号住居跡



第115図 第143号住居跡出土遺物

第42表 第143号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.4	3.5	—	121.4	70	佐野		普通	浅黄橙	カマド燃焼部	165-6
2	土師器	鉢	22.7	24.8	6.9	1908.1	95	佐野	雲・針	普通	にぶい黄橙		208-2
3	土師器	甕	(19.6)	5.4	—	95.1	5	埜北	雲・角	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	甕か	(11.6)	7.3	—	118.2	15	埜南		普通	赤	木葉痕	

調査区東部、G-8・9グリッドに位置する。第129・145・215号住居跡と重複し、新旧関係は第129号住居跡よりも古く、第145号住居跡よりも新しいが、第215号住居跡との関係は不明である。

第129号住居跡に住居跡西側の遺構上部を壊されているほか、遺構の大半が調査区域外におよんでいるため平面形は不明である。また、カマド煙道部東側は、立ち上がりをつ捉えることができなかったが、点線部がわずかに被熱赤変していたため、これを煙道部の範囲と推定した。主軸方向はN-1°-Eで、確認面からの深さは0.20mである。

カマドは北壁に設けられる。袖部は両側が確認され、構築土にはしまりのやや強い黄灰色砂質土(5層)を用いている。壁からの残存規模は左袖51cm、右袖56cmである。燃焼部底面は床面とほぼ同じ高さであり、煙道部とは明瞭な境界を持たない。煙

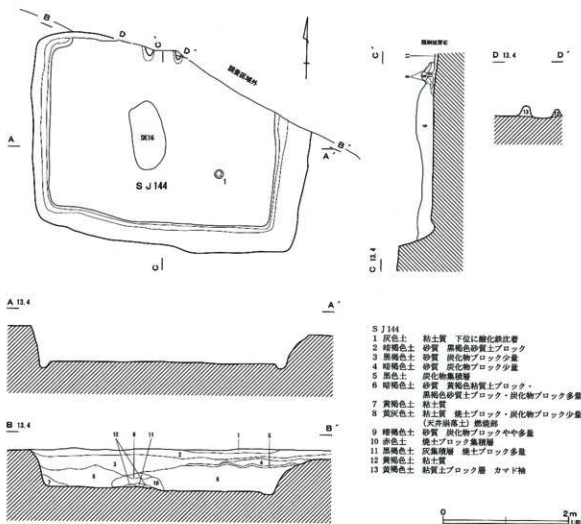
道部はほぼ水平に壁外へ150cm延びていたと推測される。

遺物は、カマドや覆土から出土しており、特に燃焼部での出土が目立つ。内容としては、土師器坏・甕などが見られ、1の土師器坏、4の土師器甕などが出土した。このほか2・3の土師器坏も燃焼部で出土している。3は内面に放射状暗文が施される。

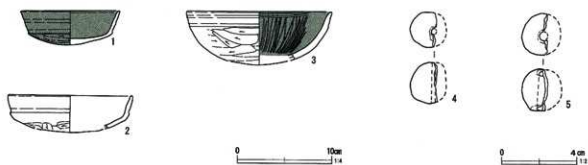
出土遺物から、時期は6世紀Ⅱ四半期に位置づけられる。

第149号住居跡 (第125・126図)

調査区北側、E-4・5グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。周辺地山は褐色粗粒砂である。第150・154号住居跡、第18・36・40号土坑と重複し、新旧関係は、第18・36・40号土坑よりも古く、第150・154号住居跡よりも新しい。第40号土坑は本住居跡覆土中に掘り込まれる。



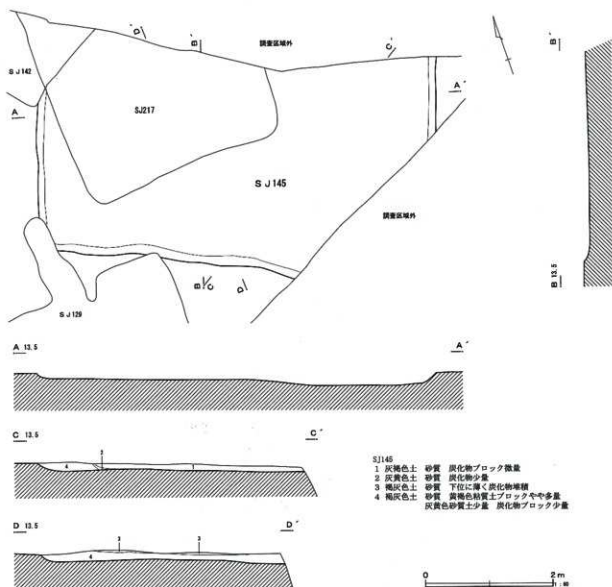
第116図 第144号住居跡



第117図 第144号住居跡出土遺物

第43表 第144号住居跡出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	10.5	3.6	—	104.9	100	埼玉		不良	浅黄橙		165-7
2	土師器	坏	(13.0)	3.5	—	46.4	20	朝南		普通	橙		
3	土師器	坏	(15.4)	5.2	—	53.0	15	埼玉		普通	黒褐		
4	土製品	土玉	径1.9孔径0.3厚2.1重5.3残55						角	普通	黄灰		Z3-1
5	土製品	土玉	径2.2孔径0.5厚2.2重5.7残55						雲	普通	灰		Z3-1



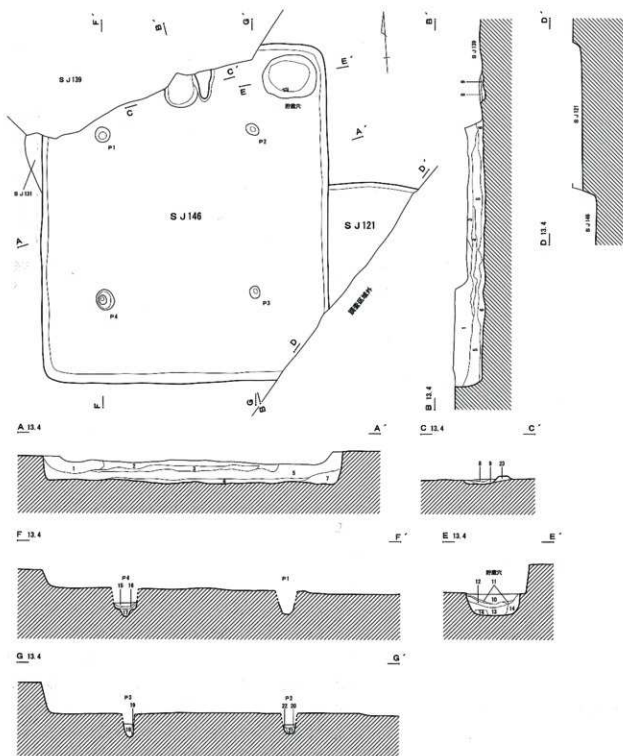
第118図 第145号住居跡

平面形は台形で、主軸方向は $N-83^{\circ}-E$ である。規模は東西軸5.90m、南北軸6.15m、確認面からの深さ0.73mである。床面は暗褐色砂質土に造られているが、貼り床などは見られなかった。また、覆土は地山と同質の粗粒砂が厚く堆積している。

カマドは東壁に設けられ、主軸方向は $S-89^{\circ}-E$ である。袖部は両側が確認された。壁からの残存規模は左袖65cm、右袖50cmで、構築土には灰褐色粘質土(21層)が用いられる。燃焼部は壁内に収まり、床面より10~15cmほど低く掘り窪められ浅い溜鉢状となる。底面および内面は非常によく被熱赤変して

いる。煙道部とはスロープ状の急傾斜をもって接続し、煙道部底面はその先も 16° の傾斜で上昇しながら壁外へ52cm延びる。燃焼部から煙道部底面には灰が厚く集積する。

遺物は、覆土から土師器高坏・甕、須臾器甕・長頸壺が出土している。3の土師器甕はカマド脇の覆土中から出土しており、胎土には大量の雲母を含んでいる。出土遺物の時期は、7世紀第IV四半期頃を示しており、本住居跡に切られている第154号住居跡出土遺物よりもやや古相である。しかしながら本住居跡は、7世紀末~8世紀初頭の第154号住居跡



S J 146

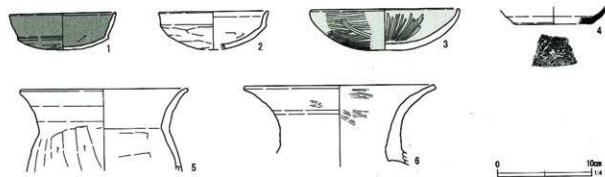
- 1 赭灰色土 粘土質 炭化物やや多量
- 2 赤色土 炭化物多量
- 3 黄褐色土 炭化物少量 灰土質土ブロック少量
- 4 赤色土 炭化物多量
- 5 黄褐色土 砂質 炭化物土多量
- 6 灰色土 砂質 炭化物粒子やや多量
- 7 黄灰色土 粘土質 下層に貼り床有り

- 8 灰色土 炭集積層
- 9 赤色土 火床面
- 10 暗褐色土 炭化物少量
- 11 灰褐色土 腐土ブロック・炭化物極く多量
- 12 暗褐色土 炭化物少量 土器片含む
- 13 灰色土 炭化物少量 粘性強
- 14 明褐色土 粘性強
- 15 暗褐色土 砂質 炭化物やや多量
- 16 黄褐色土 砂質 炭化物微量
- 17 明褐色土 粘土質 粘土質土ブロック少量
- 18 暗褐色土 砂質 炭化物やや多量

- 19 黄褐色土 砂質 炭化物微量
- 20 黄褐色土 砂質 炭化物多量
- 21 暗褐色土 砂質 粘土質土ブロック少量
- 22 黄褐色土 炭化物やや多量
- 23 黄白色土 粘土質土ブロック層 カマド跡



第119図 第146号住居跡



第120図 第146号住居跡出土遺物

第44表 第146号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.2	3.8	—	44.8	40	埼玉		普通	黒	貯蔵穴	165-8
2	土師器	坏	11.6	4.0	—	115.8	80	埼玉	針	普通	灰黄褐色	貯蔵穴	
3	土師器	坏	(15.4)	4.3	—	57.1	20	栃南		普通	赤橙		
4	須恵器	坏	—	1.9	(8.0)	—	5	南比企	針	不良	灰		
5	土師器	壺	(18.0)	8.8	—	242.5	15	茨西		普通	橙		
6	土師器	壺	(20.0)	9.3	—	246.4	5	栃南	角・針	普通	橙		

のカマドを壊して造られていることから、出土土器は混入の可能性がある。よって本住居の時期は、8世紀初頭以降と思われる。

第150号住居跡 (第127・128図)

調査区北側、E-4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。第149・154・160号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも古い。

平面形は方形で、規模は長軸4.45m、短軸3.86m、確認面からの深さ0.34mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、主軸方向はN-23°-Wである。袖部は確認されていない。燃焼部は壁内に収まり、底面は床面をほとんど掘り込まずほぼ同じ高さである。煙道部とは北壁部分で緩やかなスロープ状の段差を設け接続している。底面には炭化物や灰が薄く集積している。煙道部は外側へ向かって緩やかに傾斜し、壁外へ60cm延びる。

この他、本住居跡ではカマド掘り方を検出した。掘り方は、煙道部の外側20cmほどの範囲を不整形に掘り、しまりの強い黄褐色粘質土(17層)を詰め込み、ここへ煙道部が設けられる。北西部は第160号

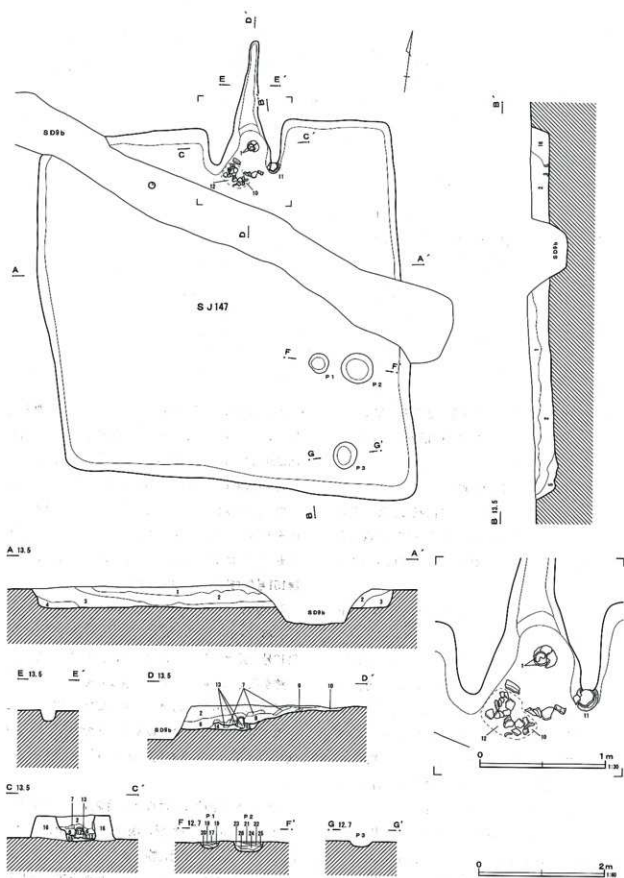
住居跡構築に伴い壊されている。規模は、東西方向は、北壁と接する部分をもっとも広く88cm、南北方向は86cmである。底面は中央部をもっとも深いが、煙道部底面はこれより深く掘り方を掘り抜いている。

出土遺物は少なく、図化できたのは土師器坏2点のみである。1は7世紀第I四半期で本住居跡に伴うもの、2は7世紀第IV四半期で流れ込みであろう。

第151号住居跡 (第129・130図)

調査区南東側、H-I-5・6グリッドに位置する。第97・132・133・138・147・247・273号住居跡、第12号溝跡と重複し、新旧関係は、第247・273号住居跡を除くほかのすべての遺構よりも古い。各所を他遺構に壊されているほか、南東部は調査区域外におよぶため平面形および規模は不明である。主軸方向はN-37°-Eで、確認面からの深さは0.08mである。

カマドは北東壁に設けられ、燃焼部のみが確認された。燃焼部には不整形の浅いピット(P9~12)が掘られ、いずれも炭化物・灰を少量含む焼土ブロックが堆積していた。燃焼部は北東壁を50cmほど外側へ切り込み、奥行き110cm、幅40cmである。



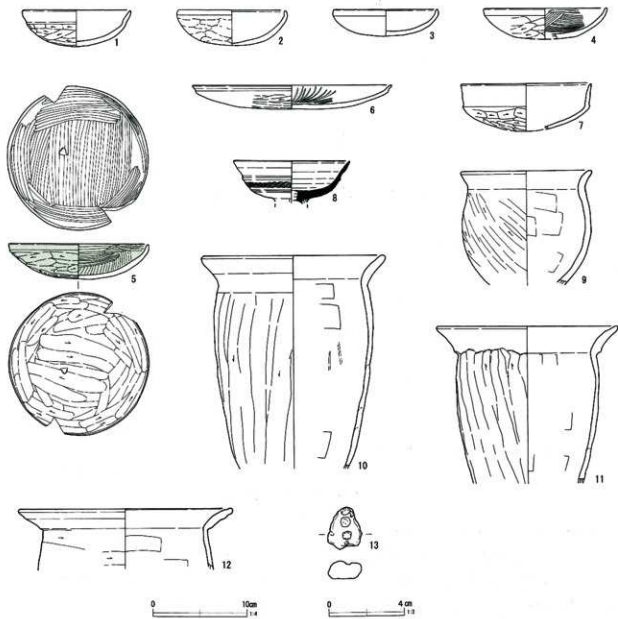
第121图 第147号住居跡

S J 147

- 1 黒色土 焼土ブロック少量 炭化物粒子多量
- 2 黄褐色土 砂質 炭化物多量
- 3 暗灰色土 砂質 黄褐色砂質土ブロックやや多量
- 4 黄褐色土 砂質 ブロック状に堆積 褐色砂質土少量
- 5 緑灰色土 砂質 焼土ブロック少量 炭化物ブロック少量
- 6 灰褐色土 砂質 焼土ブロック少量
- 7 褐色土 焼土ブロック塊層 灰少量 (天上崩落土) 煙痕跡
- 8 黄灰色土 砂質 炭化物ブロック少量
- 9 褐色土 焼土ブロック塊層
- 10 黄褐色土 砂質 炭化物ブロック少量
- 11 灰色土 炭集積層
- 12 灰色土 炭集積層
- 13 黄灰色土 砂質 炭化物ブロック少量
- 14 暗灰色土 砂質 炭化物ブロック少量
- 15 灰褐色土 砂質 カマド跡

P 1

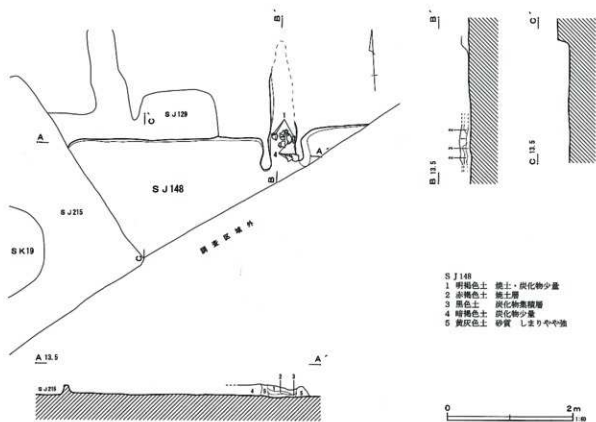
- 17 黒色土 砂質 炭化物塊層
 - 18 明青灰色土 砂質 粘土粒子少量
 - 19 青灰色土 砂質 炭化物少量
 - 20 明青灰色土 砂質 粘土粒子少量
- P 2
- 21 黒色土 砂質 炭化物層中に焼土粒子やや多量
 - 22 青灰色土 砂質 焼土粒子少量
 - 23 黄褐色土 砂質 焼土ブロック少量
 - 24 明褐色土 砂質 焼土ブロック・炭化物少量
 - 25 暗褐色土 粘土質 焼土粒子少量
 - 26 黒灰色土 粘土質 焼土跡・炭化物少量



第122図 第147号住居跡出土遺物

第45表 第147号住居跡出土遺物観察表 (第122図)

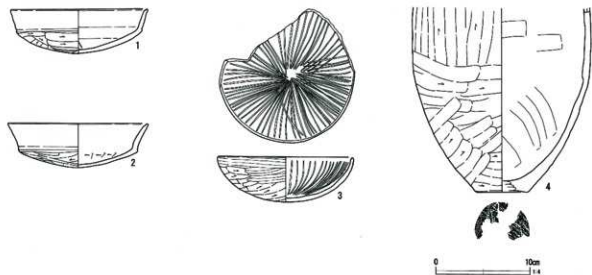
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.5	3.8	—	111.3	65	佐野		普通	明黄褐色	カマド燃焼部	185-9
2	土師器	坏	(11.4)	3.7	—	54.4	40	埜北	角	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(10.9)	2.3	—	50.6	30	埜北		普通	橙		
4	土師器	坏	(13.0)	3.2	—	42.2	30	柳南		普通	黄橙		
5	土師器	坏	14.9	3.8	—	179.5	95	佐野		普通	赤		185-10
6	土師器	皿	(21.0)	2.5	—	50.9	20	埜北		普通	灰白		
7	土師器	坏	(13.8)	4.8	—	31.6	20	埜北		普通	橙		
8	須恵器	高坏	(12.4)	4.5	—	63.8	30	管ノ沢	針	普通	灰		185-1
9	土師器	甕	(13.6)	12.1	—	346.9	25	茨西		普通	橙	被熱	
10	土師器	甕	19.0	22.4	—	845.8	40	茨西	雲	普通	明赤褐色	カマド焚口付近	
11	土師器	甕	19.0	17.5	—	534.8	30	茨西	雲、角、針	普通	橙	カマド右袖積層材	185-2
12	土師器	甕	(22.4)	6.5	—	191.3	10	群東		普通	橙	カマド焚口付近	238-2
13	瓦類・瓦類		長2.1幅1.8厚0.9重2.3								灰白	5孔、被熱	



第123図 第148号住居跡

カマド関連のピットは5基で、それぞれの平面形および規模は、P8は円形で40×38cm、床面からの深さ24cm、P9は不整形で35×35cm、床面からの深さ15cm、P10は楕円形で45×30cm、床面からの深さ4cm、P11は円形で27×24cm、床面からの深さ22cm、P12は楕円形で43×30cm、床面からの深さ15cmであ

る。カマド以外の施設は、ピットが6基検出された。北西コーナーで4基、南東コーナーで2基確認している。P1は円形で53×47cm、床面からの深さ8cm、P2は楕円形で92×70cm、床面からの深さ8cm、P3は円形で40×35cm、床面からの深さ26cm、P4は円



第124図 第148号住居跡出土遺物

第46表 第148号住居跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.7	4.6	—	191.5	70	埴北		普通	橙	カマド燃焼部	166-1
2	土師器	坏	15.0	4.7	—	151.5	60	埴北		普通	黄橙	カマド燃焼部	166-2
3	土師器	坏	(14.1)	4.8	—	156.3	70	佐野		普通	浅黄橙	カマド燃焼部	166-3
4	土師器	甕	(18.8)	19.4	(5.7)	654.6	35	茨西		普通	橙	カマド燃焼部	

形で33×32cm、床面からの深さ10cm、P5は円形で54×50cm、床面からの深さ17cm、P6は円形で39×38cm、床面からの深さ15cmである。

遺物は、覆土から土師器坏・盤・台付甕・甕、須恵器甕、鉄滓、貝巣穴痕泥岩、種子などが出土している。

出土遺物から、時期は5世紀第IV四半期である。

第152号住居跡 (第131・132図)

調査区中央部、G・H-5グリッドに位置する。第197号住居跡、第9b号溝跡と重複し、新旧関係は第9b号溝跡よりも古く、第197号住居跡よりも新しい。南西コーナーは第9b号溝跡に壊されて未検出である。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN-21°-W、規模は長軸5.70m、短軸3.51m、確認面からの深さ0.14mである。

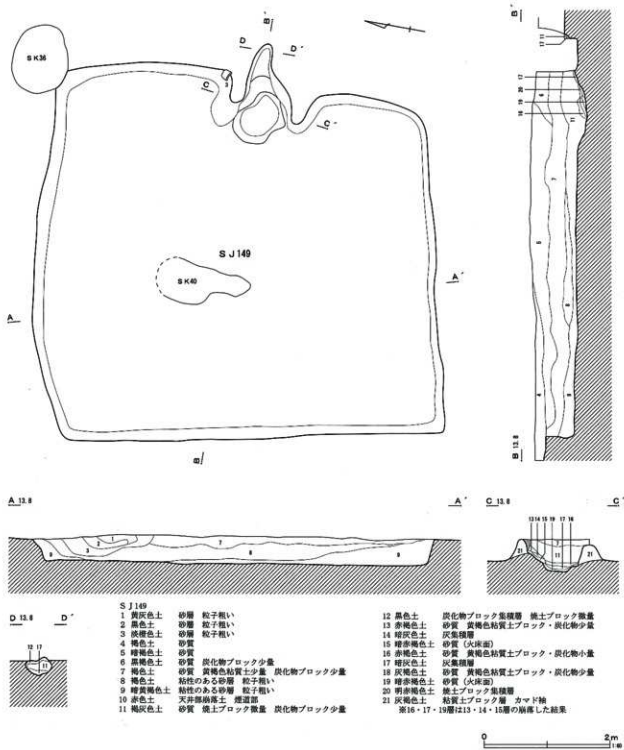
カマドは北壁中央に設けられ、方位はN-28°-Wと住居跡に対してやや西に振れている。袖部は

基部のみであるが、両側が残存している。両袖の先端部には土師器甕を倒立させ、補強材としていた。補強材は、据え付けにあたり床面を5cmほど低く掘り込んでいる。構築土には黄灰色粘質土(5層)が用いられ、補強材も含めた壁からの残存規模は、左袖32cm、右袖33cmである。床面からの残存高は10cmに満たず、補強材とした甕も口縁部から頸部までの10cm程度しか残っていない。

燃焼部は壁外におよび、底面は床面より5cmほど低い位置にあるが明瞭な掘り込みは見られない。先述の補強材据え付けのための掘り方をそのまま燃焼部底面としている。

カマド以外の施設は確認されなかった。

遺物は、カマド袖補強材として、4(左袖)、2(右袖)が出土している。検出状態では口縁部から胴部上半のみであったが、胴部破片が狭口付近にまともって出土したことから、本来は完形に近い土器が用いられていたものと思われる。



第125図 第149号住居跡

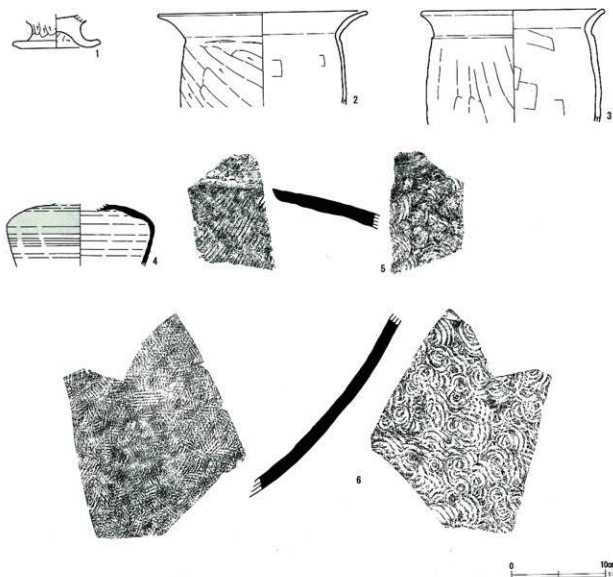
出土遺物から、時期は7世紀第IV四半期に位置づけられよう。

第153号住居跡 (第133・134図)

調査区北側、E-5グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれ、周辺地山は褐色粗粒砂で

ある。他遺構との重複はない。

平面形は南北にやや長い長方形で、主軸方向はN-12°-Wである。規模は東西軸3.86m、南北軸4.12m、確認面からの深さ0.31mである。床面は全体的に黄褐色粘質土で貼り床が貼られ、カマド前面で



第126図 第149号住居跡出土遺物

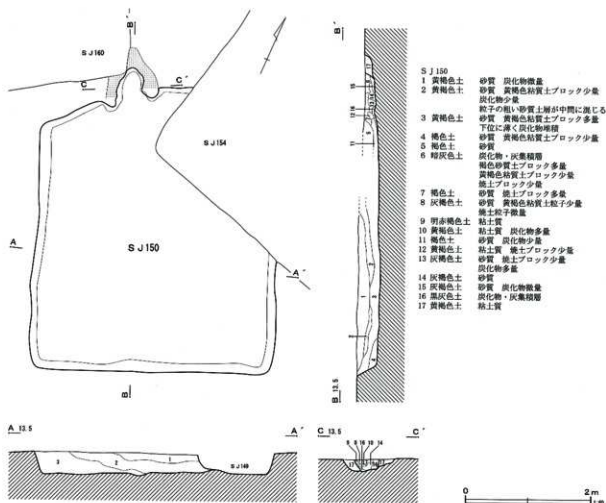
第47表 第149号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	—	2.9	(9.4)	81.8	30	茨西		普通	橙		
2	土師器	甕	(22.3)	10.0	—	116.8	5	埼玉北	角	普通	橙	カマド左脇	
3	土師器	甕	(19.6)	12.0	—	372.1	15	新治	雲、角	普通	橙		
4	須恵器	長頸壺	—	6.6	—	115.3	20	埼玉北		普通	灰		
5	須恵器	甕	—	4.4	—	708.0	5			普通	灰		
6	須恵器	甕	—	19.3	—	617.6	5			普通	黄灰		

は硬化が特に著しい。

カマドは北壁東寄りに設けられる。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖30cm、右袖35cm、床面からの残存高は25cmで、構築土には褐色砂質土

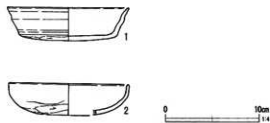
を多く含むしまりの強い黄褐色粘質土が用いられている。右袖には袖部芯材として土師器甕(5)が逆位で埋め込まれている。甕は袖構築土に完全に被覆され、カマド機能時には露出していない。



第127図 第150号住居跡

第48表 第150号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.9	3.5	—	85.7	50	塔北	角	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	坏	(12.7)	3.3	—	39.3	20	塔北	角	普通	橙		



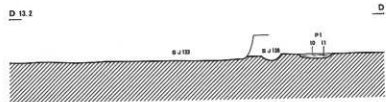
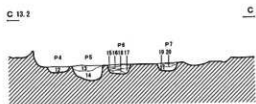
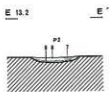
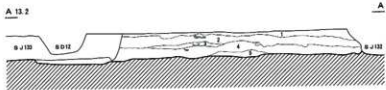
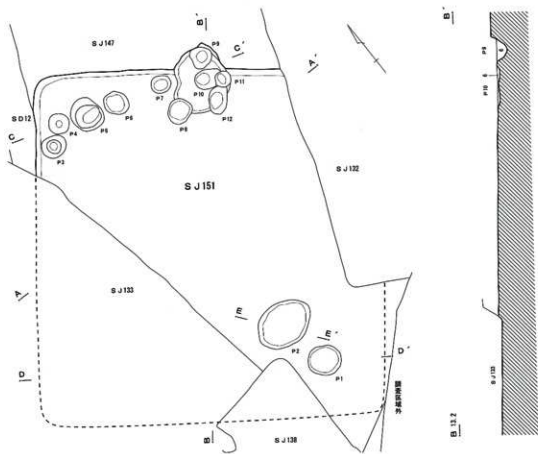
第128図 第150号住居跡出土遺物

燃焼部は床面より5cmほど低く掘り窪められ、底面は凹凸をもちながら、煙道部へ向かって緩やかに傾斜する。煙道部底面はほぼ水平で、長さ50cm、幅22cmである。天井部は左側がわずかに残っており、

高さは20cmと推定される。

また、煙道部の延長上やや左寄り、煙道部先端と接する位置で、煙出し穴が確認されている。掘り込みは確認面から3cmしかなく、煙道部底面とは20cmほどの比高差があるが、両者はわずかな接点でつながっていたものと思われる。

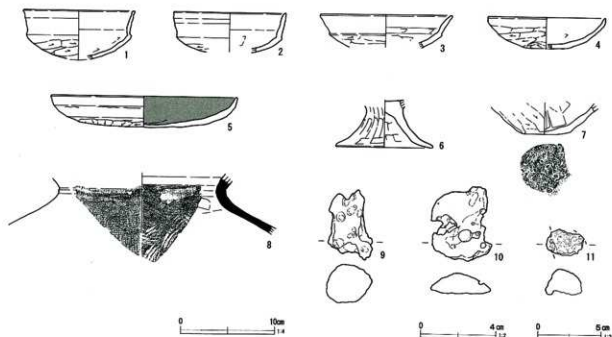
このほか、本住居跡ではカマド掘り方が検出されている。平面形は、煙道部と燃焼部を取り囲む楕円形で、東側では袖や北壁を覆っている。一部燃焼部南側の住居跡側までおよんでおり、貼り床下で検出されている。掘り方埋土には袖構築土と同様の、し



- S J 151
- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 暗灰色土 | 砂質 炭化物多量 |
| 2 黒褐色土 | 黄灰色砂質土多量 焼土ブロック少量
炭化物多量 |
| 3 暗灰色土 | 砂質 黄灰色砂質土多量 炭化物粒子多量 |
| 4 黄灰色土 | 砂質 黄褐色砂質土ブロック多量
炭化物ブロック少量 |
| 5 黒色土 | 炭化物ブロック集積層
焼土ブロック極く多量 |
| 6 棕色土 | 焼土ブロック集積層 炭化物・灰少量
炭化物層 |
| 7 黒色土 | 焼土粒子・ブロックやや多量 炭化物多量 |
| 8 暗赤褐色土 | 炭化物やや多量 |
| 9 黄灰色土 | 炭化物やや多量 |
| 10 暗赤褐色土 | 焼土粒子・炭化物やや多量 |
| 11 黄灰色土 | 炭化物少量 |
| 12 黒色土 | 粘質土ブロック・焼土ブロックやや多量 |
| 13 暗赤褐色土 | 焼土粒子多量 |
| 14 黒灰色土 | 焼土ブロック・炭化物ブロック多量 |
| 15 暗赤褐色土 | 砂質 焼土粒子・炭化物やや多量 |
| 16 暗赤褐色土 | 砂質 焼土粒子・炭化物少量 |
| 17 黄褐色土 | 砂質 粘質土粒子少量 炭化物少量 |
| 18 暗灰色土 | 砂質 炭化物少量 |
| 19 暗赤褐色土 | 砂質 焼土粒子・炭化物やや多量 |
| 20 黄褐色土 | 砂質 炭化物少量 |
| 21 暗黄灰色土 | 砂質 炭化物やや多量 |



第129図 第151号住居跡



第130図 第151号住居跡出土遺物

第49表 第151号住居跡出土遺物観察表 (第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	5.2	-	50.5	20	群東	角	良好	にぶい橙		
2	土師器	坏	(12.0)	4.2	-	39.6	10	群東	針	普通	橙		
3	土師器	坏	(14.0)	3.5	-	38.1	10	群東	針	良好	橙		
4	土師器	坏	(12.6)	3.3	-	29.7	20	橋南	普通	良好	にぶい黄橙		
5	土師器	盤	(19.8)	5.2	-	139.4	20	佐野	針	良好	浅黄		
6	土師器	台付甕	-	5.0	(10.4)	103.2	5	茨西	普通	にぶい橙	被熱		
7	土師器	甕	-	3.3	(4.2)	66.5	10	茨西	角	普通	赤褐	木葉痕	
8	須恵器	甕	-	6.4	-	117.8	5		針	普通	灰		
9	貝類(環状)		長3.3幅1.4厚2.0重11.5								にぶい橙		238-2
10	貝類(環状)		長3.9幅3.1厚1.1重7.9								灰白	12孔、被熱	238-1
11	鉄滓		長(2.0)幅2.8厚(1.7)重5.4										

まりの強い黄褐色粘質土を用いている。煙道部と掘り方底面の標高差は25cmほどもあり、煙道部底面は掘り方内に設けられていた。

遺物は、床面や覆土からも破片が出土しているが、カマド燃焼部では特に土器が集中した。5はカマド右袖に用いられた補強材である。3・4は土師器甕とともにカマド燃焼部で出土している。このほか、覆土中から鉄鍬が出土した。

出土遺物から時期は、8世紀前半に位置づけらる。

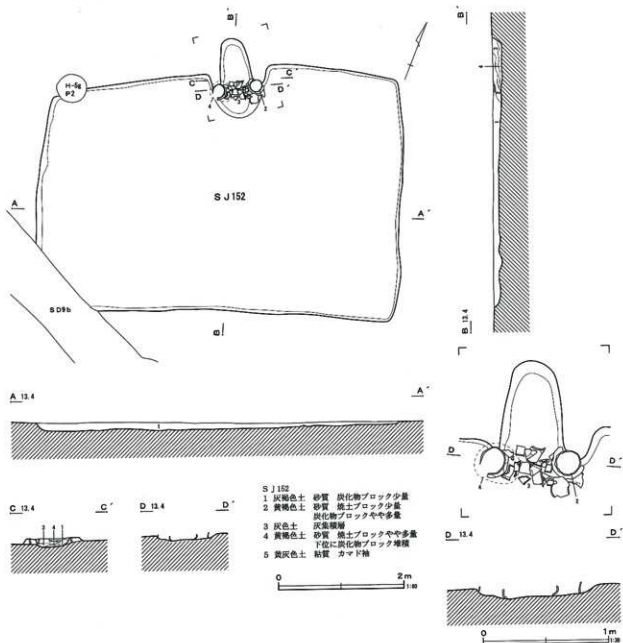
第154号住居跡 (第135・136図)

調査区北側、E-4グリッドに位置し、流路跡第

二次積層に掘り込まれる。第149・150号住居跡と重複し、新旧関係は第149号住居跡よりも古く、第150号住居跡よりも新しい。

平面形は東西にやや長い長方形で、主軸方向はN-109°-Eである。規模は東西軸5.05m、南北軸3.87m、確認面からの深さ0.21mである。

カマドは東壁中央に設けられる。袖部は両側ともに確認されていない。燃焼部は床面よりわずかに低く掘り窪められ、底面には灰が集積する。煙道部は他遺構により削平される。カマドの規模は、残存部で奥行き100cm、幅45cmである。



第131図 第152号住居跡

カマド以外の施設としては、壁溝が確認されている。壁溝は西壁、北壁、南壁の一部で確認され、規模は幅7~20cmで、床面からの深さは10cmである。

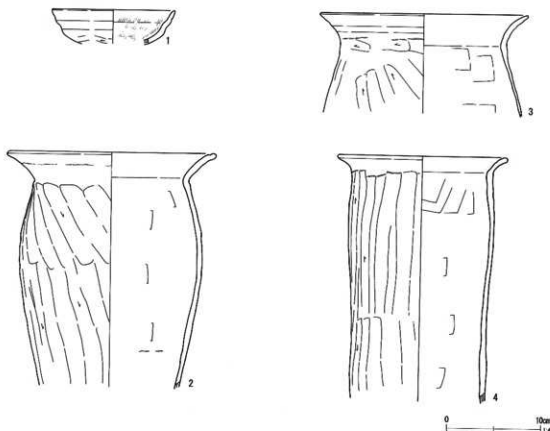
遺物は、カマドや床面、覆土から、土師器坏、須恵器坏・坏蓋が出土している。床面および覆土中からは、完形の須恵器坏が2点出土した。3の須恵器坏蓋は覆土中から、また、4は片岩を含む末野産の坏で、床面から出土している。

時期は、須恵器坏から7世紀末から8世紀第I四

半期に位置づけられよう。

第155住居跡 (第109・110図)

調査区北側、E-5・6グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれ、周辺地山は褐色粗粒砂である。第141号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡のほうが古い。同住居跡は、本住居跡より5~10cmほど床面が低く、重複部分は床面が一切残っていない。残存状況は極めて悪いが、平面形は東西に長い長方形で、規模は東西軸5.72m、南北軸4.22



第132図 第152号住居跡出土遺物

第50表 第152号住居跡出土遺物観察表 (第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.1)	3.7	-	43.1	15	埴北		普通	灰黄褐		
2	土師器	甕	21.6	24.9	-	949.0	35	埴北	雲、角	普通	灰黄褐	カマド右袖構築材	
3	土師器	甕	22.0	10.6	-	348.1	20	茨西		普通	灰白		
4	土師器	甕	17.7	25.8	-	925.3	70	埴南	雲、角	普通	橙	カマド左袖構築材	208-3

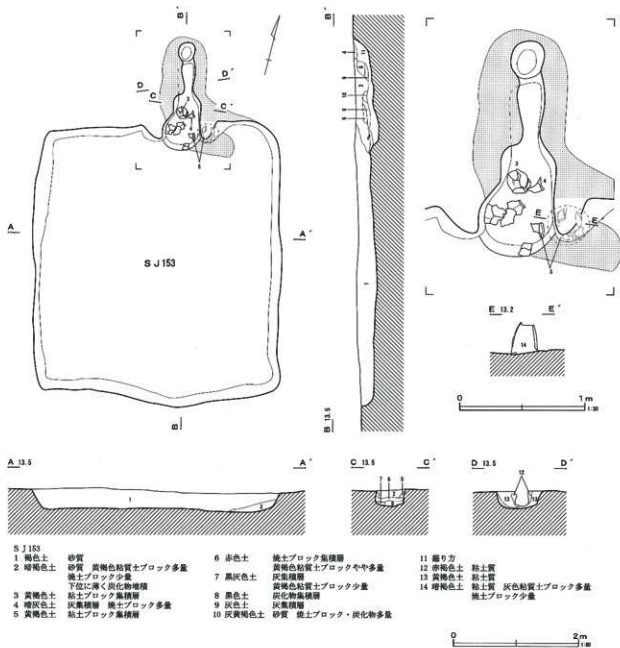
m、確認面からの深さ0.44mである。

カマドは西壁南寄りに設けられ、方位はS-66°-Wである。袖部は両側が残存しているが、重複する第141号住居跡により、右袖は一部、左袖は大半が壊されている。壁からの残存規模は、左袖50cm、右袖47cmであり、床面からの残存高は右袖10cm、構築土にはしまりの強い黄灰色粘質土（38層）が用いられている。

燃焼部も第141号住居跡と重複していたが、底面が低く掘り窪められていたため、灰や炭化物、焼土ブロックの集積を確認できた。燃焼部は壁内に収ま

り、床面より10cmほど低く掘り窪められ、煙道部とは10~15cmほどの低い段差をもっている。煙道部は手前が幅広く奥が狭まる形状で、底面は若干の凹凸を持ちながら、10°の傾斜で上昇し、壁外へ140cm延びる。

また本住居跡ではカマド掘り方を確認している。掘り方の平面形は不整形で、埋土はカマド袖構築土と同質のしまりの強い黄褐色粘質土（39層）である。煙道部および煙出しは、この掘り方中に掘り込まれており、底面は煙道部底面と同じかやや低い位置にある。平面的には、煙道部先端は掘り方から突き出



第133図 第153号住居跡

している。

第156号住居跡 (第137図)

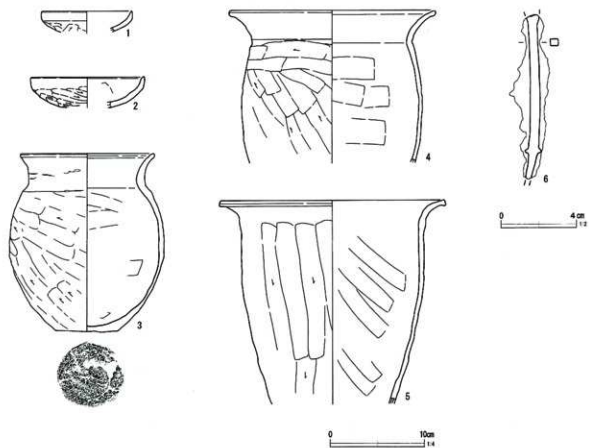
調査区北側、D-4・5グリッドに位置し、流路跡二次堆積層に掘り込まれている。大半が調査区域外におよんでおり、平面形および規模は不明である。床面には炭化物が薄く堆積し、覆土は周辺地山と似た褐色砂質土（1層）が厚く堆積する。確認面からの深さは0.23mである。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、流路跡第

二次堆積層に掘り込まれていることから、6世紀後半以降であろう。

第157号住居跡 (第138・139図)

調査区北側、D・E-3、E-4グリッドに位置し、流路跡二次堆積層に掘り込まれている。第112・160号住居跡、第28号土坑と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しく、土坑よりも古い。北壁は第112号住居跡と接しているが、調査時、同住居跡との前後関係を誤り、カマド上部の記録はできな



第134図 第153号住居跡出土遺物

第51表 第153号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	坏	(9.4)	2.2	-	15.4	15	茨西	角	普通	橙			
2	土師器	坏	(12.2)	3.2	-	27.2	20	茨西	角	良好	にぶい橙			
3	土師器	甕	14.0	18.5	6.5	795.0	85	埼玉	雲	普通	浅黄	カマド焼部	被熱	208-4
4	土師器	甕	(22.1)	16.1	-	199.7	10	埼玉	角	普通	橙	カマド焼部		
5	土師器	甕	(23.6)	21.5	-	434.0	25	群東	雲	普通	橙	カマド右袖構築材		
6	鉄製品	針	長(8.5)幅0.4重18.3									頸飾輪絞		237-1

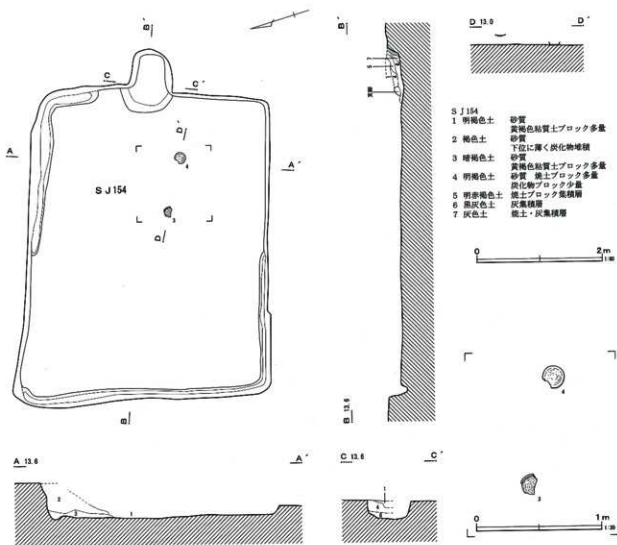
かった。

平面形は方形で、主軸方向はN-31°-Wである。規模は東西軸5.52m、南北軸4.72m、確認面からの深さ0.30mである。

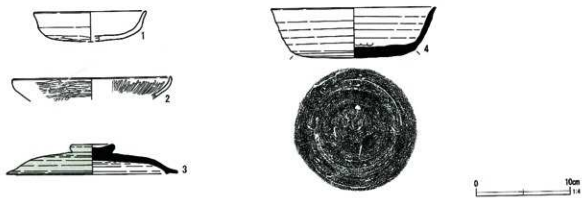
カマドは北壁東寄り に設けられている。先述の理由により煙道部先端の遺構上部の記録はできなかった。袖部は両側が確認され、右袖先端には補強材として土師器甕(8)が倒立して据えられていた。補強材まで含めた壁からの残存規模は、左袖47cm、右

袖38cmで、床面からの残存高は左袖27cm、右袖20cmで、構築土にはしまりの強い黄褐色粘質土(15層)が用いられていた。

焼部は床面より15cmほど低く掘り窪められ、浅い土坑状となる。煙道部とは5~10cmほどの段差をもって接続し、焼部から煙道部底面には炭化物(13層)が厚く集積している。煙道部は重複する第112号住居跡の覆土中に掘り込まれている。天井は完全に落ちており、被熱赤変し、焼きしまった焼土層(11



第135図 第154号住居跡



第136図 第154号住居跡出土遺物

第52表 第154号住居跡出土遺物観察表 (第136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.0	—	—	62.8	40	埴北	針	普通	橙		
2	土師器	坏	(16.0)	2.3	—	10.8	5	佐野	雲、角	良好	にぶい赤褐		
3	須恵器	蓋	(18.2)	3.1	—	332.2	60	東海		良好	灰		166-4
4	須恵器	坏	17.5	5.2	—	402.5	95	末野か		良好	明焼灰		166-5

層)が確認された。底面は外側へ向かって4°の角度でわずかに上昇している。燃烧部の規模は奥行き78cm、幅53cm、煙道部は長さ109cm、幅31cmである。

遺物は、8が袖補強材として出土したほか、燃烧部では3の土師器坏が出土している。3は内面に斜方向の暗文を2段に施している。このほか、住居跡床面や覆土から、土師器坏・甕・鉢、須恵器坏・甕、土製円板などが出土している。時期は出土土器から、7世紀末から8世紀第I四半期に位置づけられる。

第158号住居跡 (第140・141図)

調査区北側、D-4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。第111号住居跡、第35号土坑、第8号溝跡と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。カマドおよび住居跡東側が調査区域外におよんでいるほか、西側を第111号住居跡に壊されているため、平面形は不明である。主軸方向はN-20°-Wで、規模は確認できた南北軸で4.15m、確認面からの深さ0.27mである。

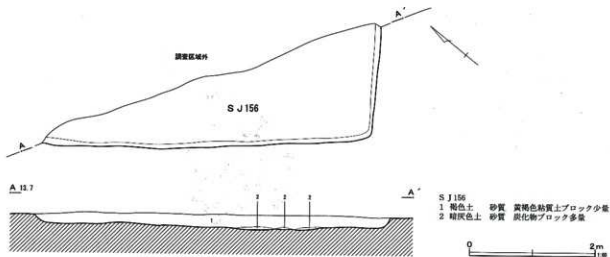
カマドは調査区側溝によって壊されていたが、炭化物や焼土ブロックの分布から燃烧部の範囲および袖部の有無を確認することができた。カマドは北壁に設けられ、袖部は両側が残存していた。燃烧部の幅は65cmである。

遺物は、覆土から土師器坏や甕などの破片が少量出土している。出土遺物の時期は8世紀前半を示しているが、他遺構との重複関係からは、7世紀末～8世紀第I四半期とした第111号住居跡よりも古い時期に位置づけられよう。

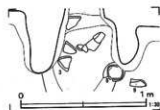
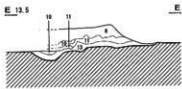
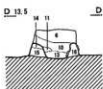
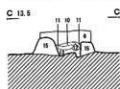
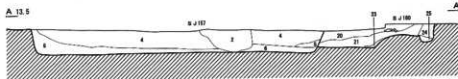
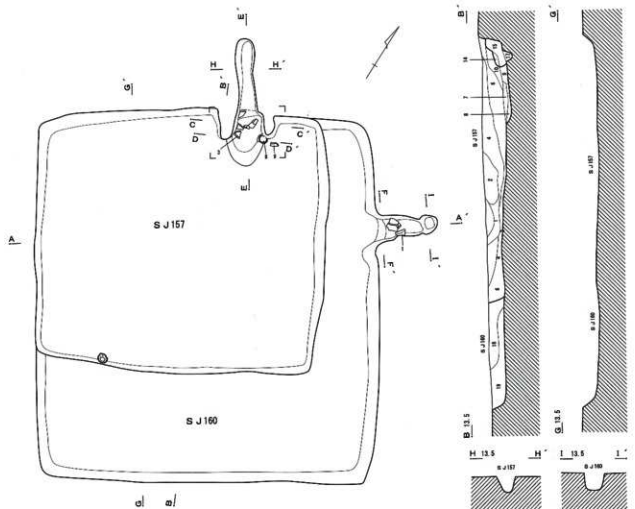
第159号住居跡 (第142・143図)

調査区中央北西寄り、F-3グリッドに位置する。平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。規模は長軸4.86m、短軸3.36m、確認面からの深さ0.22mである。

カマドは北壁西寄りに設けられ、袖部はわずかに両側が確認された。両袖の先端には補強材とした土師器甕(2・3)が逆位で据えられていた。出土位



第137図 第156号住居跡

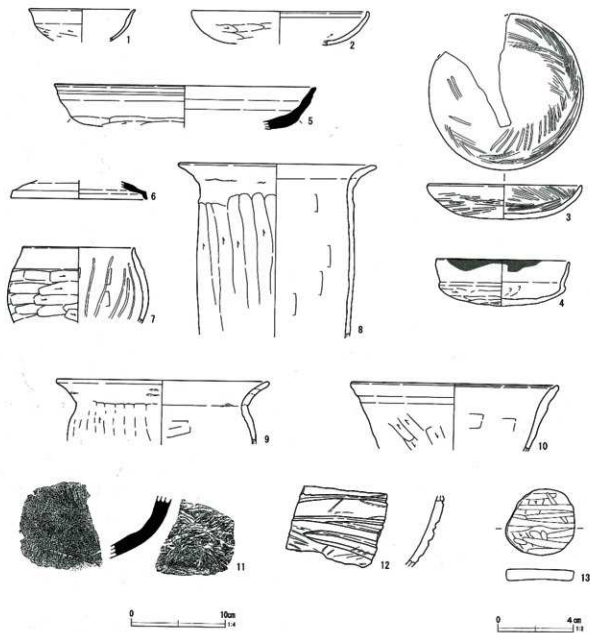


S J 157

- 1 黄褐色土 砂質 褐色砂質土層く多量
(遺構による圧力を受けた層)
- 2 灰色土 砂質 暗灰色砂質土ブロック層く多量
炭化物多量
下位に炭化跡状層 (遺構による圧力を受けた層)
- 3 暗褐色土 砂質 黄土ブロックや多量 炭化物ブロック多量
(遺構による圧力を受けた層)
- 4 褐色土 砂質 黄土ブロック少量 炭化物粒子微量
下位に薄く炭化物堆積
- 5 灰褐色土 砂質
- 6 褐色土 砂質
- 7 褐色土 砂質 黄土ブロック・炭化物ブロック多量
- 8 褐色土 砂質 黄土ブロック・炭化物ブロック多量
下位に薄く炭化物堆積
- 9 褐色土 砂質
- 10 褐色土 砂質 黄土ブロック微量 炭化物多量

- 11 赤褐色土 黄土ブロック層 固く焼きしまる
- 12 暗茶褐色土 炭化物少量
- 13 厚褐色土 炭化物堆積層 黄土少量
- 14 褐色土 黄土ブロック堆積層 カマド跡
- 15 黄褐色土 粘質土ブロック層 カマド跡
- 16 黒褐色土 砂質 炭化物少量 粒子粗い カマド跡
- 17 褐色土 砂質 黄褐色粘質土ブロック多量
- S J 160
- 18 褐色土 砂質 黄土ブロック微量 炭化物多量
- 19 褐色土 砂質
- 20 黄褐色土 砂質
- 21 暗褐色土 砂質 黄土ブロック多量 炭化物粒子少量
- 22 暗褐色土 砂質
- 23 灰色土 炭化物層 黄土粒子微量
- 24 褐灰色土 砂質 黄土ブロック多量
- 25 黒色土 炭化物堆積層 黄土ブロック層く多量

第138図 第157・160号住居跡



第139図 第157号住居跡出土遺物

置は、壁から20cmの場所で、袖の延長というよりは袖のやや内側に据え置かれている。左袖の土師器甕の残りは極めて悪く、袖構築土に埋め込まれた口縁部分がわずかに遺存するのみで、残りは壊され焼部に散っていた。右袖の補強材も残存率が悪く、胴部上半までしか残っていない。焼部は床面よりわずかに低い位置にあるが、明確な掘り込みは見られない。焼部の規模は、奥行き62cm、幅60cmで、推定される焚口幅は、これより狭い30cmである。

遺物はカマドや覆土中から出土したが、図化できたものはカマド出土遺物のみである。2・3は両袖の補強材で、口縁部から頸部付近までの破片として検出したが、焚口付近に胴部上半の破片が分布しており、補強材は本来、これより残存状況が良かったものと思われる。時期は、出土遺物から7世紀末～8世紀第I四半期に位置づけられよう。

第160号住居跡 (第138, 144図)

調査区北側、D・E-3・4グリッドに位置し、

第53表 第157号住居跡出土遺物観察表 (第139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.2)	3.3	—	13.7	5	佐野		普通	明黄褐		
2	土師器	坏	(18.0)	3.5	—	22.6	15	新治	角	普通	明黄褐		
3	土師器	坏	16.4	3.6	—	195.4	75	佐野		普通	橙	カマド燃焼部 内外面赤彩か	166-6
4	土師器	坏	14.0	4.8	—	166.3	65	埴北		普通	灰黄		166-7
5	須恵器	盤	(27.8)	4.5	—	101.1	10	管ノ沢か		普通	灰		
6	須恵器	甕	(14.4)	1.9	—	12.2	10	南比企		普通	灰白		
7	土師器	鉢	(12.0)	8.0	—	108.2	10	佐野		普通	橙		
8	土師器	甕	(21.0)	18.1	—	647.2	25	埴南		普通	橙	カマド右袖構築材	185-4
9	土師器	甕	(22.8)	6.5	—	95.2	5	埴北	角	普通	にぶい橙		
10	土師器	瓶か	(22.0)	7.0	—	128.3	10	埴南	角	普通	橙	被熱	
11	須恵器	甕	—	6.6	—	145.6	5			普通	灰		
12	土師器		長3.6幅4.6厚0.5重12.1						雲、角	普通	橙	砥石に転用か	
13	土製品	円板	長3.4幅3.6厚0.6重8.5						角、針	普通	橙	土器片の周囲を研磨したもの	

流路跡第二次堆積層に掘り込まれている。第150・157号住居跡、第28号土坑、第8号溝跡と重複し、新旧関係は、第150号住居跡より新しく第157号住居跡、第28号土坑、第8号溝跡よりも古い。第157号住居跡とは北壁および西壁を共有していることから、同住居跡は、本住居跡を建て替えている可能性がある。

平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN-42°-Eである。規模は長軸南北5.90m、短軸東西5.40m、確認面からの深さ0.35mである。

カマドは東壁北寄りに設けられ、方位はN-60°-Eである。袖部は右側でわずかに確認され、構築土には黄褐色粘質土が用いられていた。燃焼部は床面とはほぼ同じ高さであり、壁をわずかに切り込んでいる。煙道部とは20cmほどのスロープで接続しており、底面には灰(23層)が集積する。煙道部底面はほぼ水平に外側へ延び、煙出し穴へ接続する。規模は、長さ82cm、幅40cmで、確認面からの深さ27cmである。

煙出し穴は、直径26cmの円筒状にほぼ垂直に掘り込まれ、底面は煙道部より10cmほど低く、炭化物が厚く集積する。

遺物は、カマド煙道部から1の土師器甕が出土している。時期は7世紀第IV四半期頃のもので、第157号住居跡出土遺物と大きな隔たりがない。

第161号住居跡 (第145・146図)

調査区北東部、F-6・7、G-6グリッドに位置する。第113・115・135・136号住居跡と重複し、新旧関係は第115・135・136号住居跡よりも古く、第113号住居跡よりも新しい。確認面からの掘り込みが浅く、住居跡北半の検出にとどまる。南側の立ち上がりは検出されず、平面形は不明である。主軸方向はN-34°-E、規模は残存する東西軸で4.84m、確認面からの深さ0.08mである。

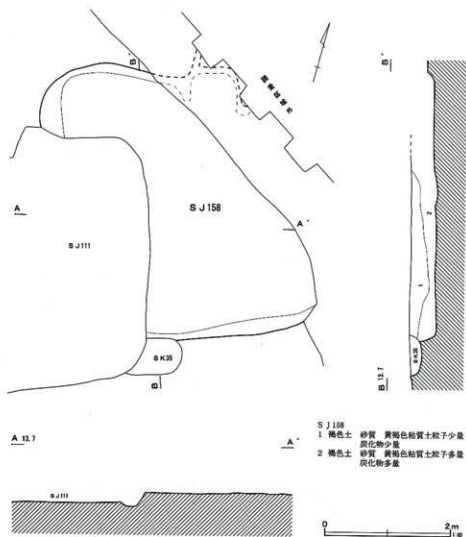
カマドは北壁やや東寄りに設けられる。袖部は両側の基部のみが確認された。壁からの残存規模は、左袖45cm、右袖43cm、床面からの残存高は左右ともに8cmである。燃焼部は床面よりわずかに低い位置にあるが、明確な掘り込みは見られない。煙道部とは段差をもち、底面は水平のまま移行する。燃焼部から煙道部の規模は180cmである。

遺物は、カマド、床面および覆土から、土師器坏・甕、須恵器甕などが出土している。4は燃焼部底面で出土した土師器甕の破片である。3は6世紀第I四半期の土師器坏で、その他の遺物と時期が合わず、混入の可能性がある。

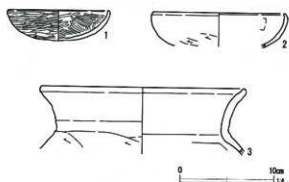
住居跡の時期は、出土遺物から7世紀第I四半期に位置づけられるだろう。

第162号住居跡 (第147・148図)

調査区西側、F-1・2グリッドに位置する。第



第140図 第158号住居跡



第141図 第158号住居跡出土遺物

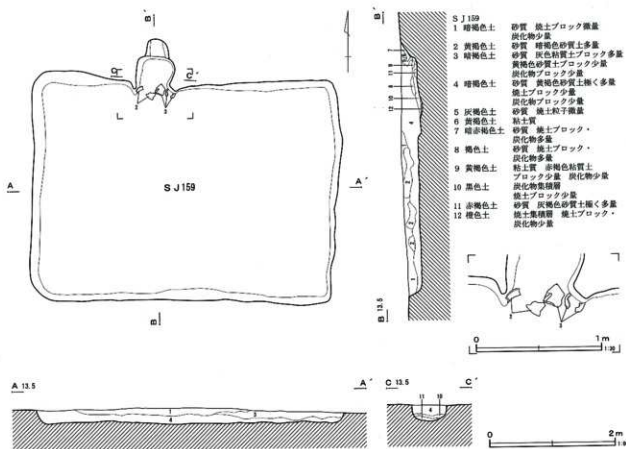
171・185号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN-20°-Wである。規模は東西軸3.42m、南北軸2.48m、確認面からの深さ0.25mである。

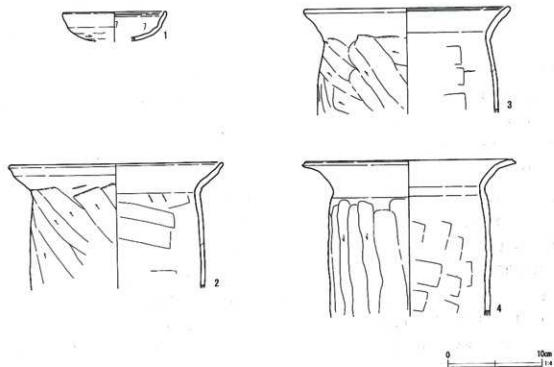
カマドは北壁やや東寄りに設けられ、方位はN-27°-Wで、住居跡本体に対してやや西に振れている。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は、左袖50cm、右袖35cmである。燃焼部底面は床面より

第54表 第158号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.3	-	44.3	40	茨西	針	良好	橙		
2	土師器	坏	(14.0)	3.6	-	18.3	10	群東		普通	橙		
3	土師器	甕	(11.0)	7.0	-	126.8	5	群東			にぶい橙		



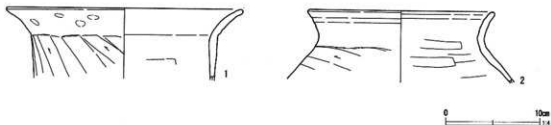
第142図 第159号住居跡



第143図 第159号住居跡出土遺物

第55表 第159号住居跡出土遺物観察表 (第143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.1	—	27.1	15	柳南	針	普通	橙	カマド	
2	土師器	甕	(22.4)	13.2	—	203.9	15	茨西	雲、角	良好	橙	カマド左袖構築材	
3	土師器	甕	22.0	11.2	—	512.4	20	茨西	雲	普通	橙	カマド右袖構築材	
4	土師器	甕	(22.2)	16.5	—	447.9	15	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	カマド	



第144図 第160号住居跡出土遺物

第56表 第160号住居跡出土遺物観察表 (第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(24.6)	7.5	—	140.4	10	埼玉	北	普通	にぶい黄橙	カマド煙道部	
2	土師器	甕	(20.0)	7.6	—	102.6	10	埼玉	北	良好	橙		

もわずかに低い位置にあるが、明確な掘り込みは見られない。煙道部とは10cmほどのわずかな段差をもって接続し、段差手前の底面には被熱箇所が見られた。煙道部底面は10°の傾斜で上昇しながら、壁外へ123cm延びる。

遺物は、土師器の甕・坏、須恵器の甕、ロクロ土師器の坏、石製模造品などが出土している。このうち4はロクロ土師器で、カマド脇から出土しており、時期は9～10世紀に位置づけられ本住居跡に帰属する。2は覆土から出土しており6世紀Ⅳ四半期に位置づけられる。

第163号住居跡 (第149・150図)

調査区西側、F・G-2グリッドに位置する。第179・233号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。

平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN-13°-Wである。規模は東西軸3.41m、南北軸3.52m、確認面からの深さ0.38mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、方位はN-0°

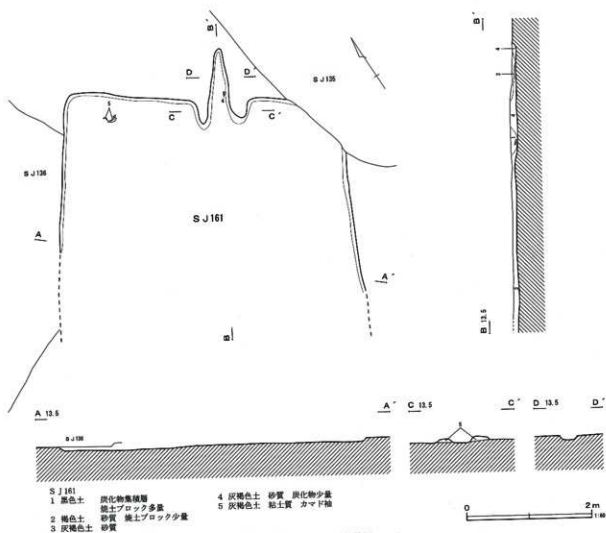
で住居跡本体に対してやや東に振れている。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は、左袖51cm、右袖43cmで、構築土には黄褐色粘土ブロックを含む褐色砂質土(13層)が用いられている。燃焼部底面は、床面とはほぼ同じ高さであり、掘り込みは見られない。煙道部とは10cmほどの明瞭な段差をもって接続する。煙道部底面は、外側へ向かって5°の傾斜で上昇し、壁外へ63cm延びる。煙道部天井および煙出しは崩落している(4・6・8層)。

遺物は覆土中より1の土師器坏が出土している。時期は10世紀前半に位置づけられよう。

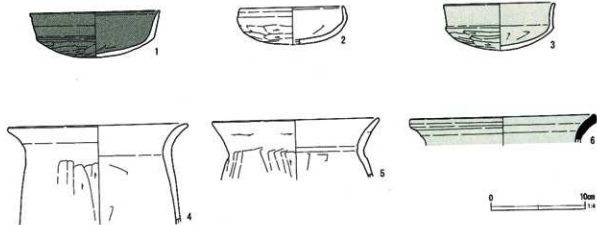
第164号住居跡 (第151・152図)

調査区中央、G-4、H-4・5グリッドに位置する。第109・120・173号住居跡、第9a-c号溝跡と重複し、新旧関係は、第173号住居跡よりも新しく、その他の遺構よりも古い。住居跡中央で第9a-c号溝跡が東西に走り床面を掘り抜いている。

平面形は南北にやや長い長方形で、主軸方向はN-4°-Wである。規模は、東西軸3.65m、南北軸



第145図 第161号住居跡



第146図 第161号住居跡出土遺物

第57表 第161号住居跡出土遺物観察表 (第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	4.8	—	147.6	55	埴北		良好	黒	内外面赤彩か 漆付着か	
2	土師器	坏	(11.0)	3.9	—	72.3	40	佐野		普通	ふい貴橙		
3	土師器	坏	(10.8)	4.9	—	64.6	35	埴南	針	良好	赤褐		
4	土師器	甕	(19.0)	10.6	—	116.4	5	群東		良好	灰黄褐	カマド燃焼部底面	
5	土師器	甕	(17.8)	6.4	—	105.9	5	茨西	針	普通	橙		
6	須恵器	甕	(19.6)	2.8	—	19.9	5	湖西か		普通	灰		

4. 18m、確認面からの深さ0.21mである。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN-11°-Wと、住居跡本体に対してやや西に振れている。袖部は両側で確認されるが、遺存状況は極めて悪い。左袖の残存高は15cmほどであるが、壁からの残存規模はほとんどない。また右袖は、壁から50cmほど残るが、残存高は10cmに満たない。ともに地山を削り出している。

燃焼部はおおむね壁内に収まり、底面は左側が浅く掘り窪められ、浅いピット状となる。底面には炭化物を多く含んだ暗褐色粘質土(6層)が堆積する。煙道部は、燃焼部とは10cmほどの明瞭な段差を設けて接続する。底面は外側へ向かって傾斜しており、壁外へ110cm延びる。

遺物はカマド煙道部や住居跡床面出土している。1は土師器高坏で内外面に赤彩が施される。2の土師器甕もカマド内で出土している。4はカマド前面の床面出土している。

時期は、出土遺物から6世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第165号住居跡 (第153・154図)

調査区西側、H・I-1・2グリッドに位置する。第208・209・212・213・226・228・232号住居跡、第25号土坑と重複し、新旧関係はいつれの遺構よりも新しい。西側は調査区域外におよんでおり平面形は不明である。規模は、残存する南北軸で4.92m、確認面からの深さ0.23mで、主軸方向はN-12°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられる。袖部は両側で確認され、構築土には灰褐色粘質土(22層)を用いて

いる。壁からの残存規模は、左袖50cm、右袖42cm、床面からの残存高は18cmで、確認面まで残っていた。袖部内側は非常に良く焼けており、被熱赤変している。

燃焼部は、北壁を30cmほど切り込んで造られている。底面は床面よりわずかに低い位置にあるが、明瞭な掘り込みは見られない。手前側の底面では被熱赤変した箇所が確認されている。規模は、奥行き75cm、幅45cmである。

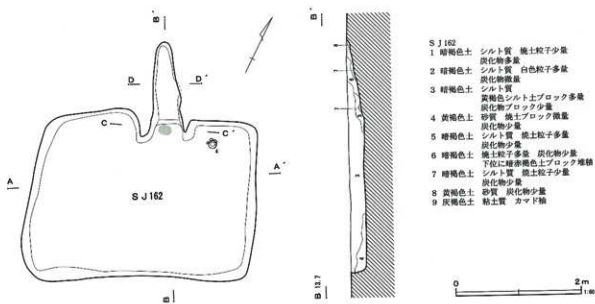
煙道部は15cmほどの明瞭な段差をもって燃焼部と接続し、底面は平坦なまま壁外へ125cm延び、先端部で煙出し穴と接続する。煙道部の規模は、手前側の幅31cm、先端付近で22cmになる。煙出し穴は直径28cm、確認面からの深さ16cmである。燃焼部から煙出し穴にかけて、底面には灰が厚く集積する。

カマド以外の施設としては貯蔵穴、ピットが検出された。貯蔵穴は、住居跡北東コーナーで確認されている。平面形は方形に近く、規模は東西軸55cm、南北軸59cm、床面からの深さは25cmである。

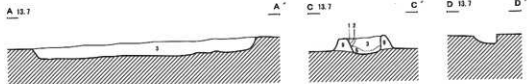
ピットは住居跡南側で3基確認されており、いずれも床面から掘り込まれる。P1は楕円形で60×53cm、床面からの深さ25cm、P2は楕円形で45×41cm、床面からの深さ29cm、P3は円形で40×30cm、床面からの深さ21cmである。

遺物は床面および覆土中から、土師器坏・高坏・甕、須恵器甕が出土している。カマド前面から住居跡中央部では土師器甕や高坏がまとめて出土した。6は栃木県南部の高坏で中実の脚部となる。

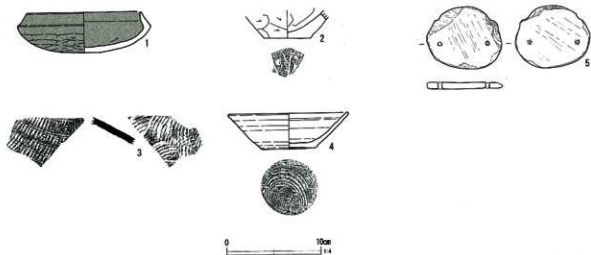
土器以外の遺物としては、土玉、貝巣穴痕泥岩、植物種子が出土している。貝巣穴痕泥岩はカマド内



- S J 162
- 1 暗褐色土 シルト質 焼土粒子少量
炭化物多量
 - 2 暗褐色土 シルト質 白色粒子多量
炭化物多量
 - 3 暗褐色土 シルト質
高褐色シルト土ブロック多量
炭化物ブロック少量
 - 4 黄褐色土 砂質 焼土ブロック散在
炭化物少量
 - 5 暗褐色土 シルト質 焼土粒子多量
炭化物少量
 - 6 暗褐色土 焼土粒子多量 炭化物少量
下段に暗赤褐色土ブロック塊積
 - 7 暗褐色土 シルト質 焼土粒子少量
炭化物少量
 - 8 黄褐色土 砂質 炭化物少量
 - 9 灰褐色土 粘土質 カマド跡



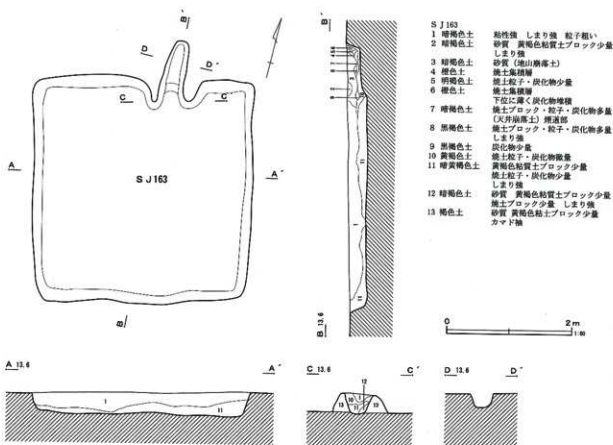
第147図 第162号住居跡



第148図 第162号住居跡出土遺物

第58表 第162号住居跡出土遺物観察表 (第148図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.2	-	66.8	25	茨西		良好	黒褐	本業炭	166-8 234-2
2	土師器	甕	-	2.9	(5.0)	33.5	5	稲南	角	良好	明黄褐		
3	須恵器	甕	-	2.8	-	32.8	5	比企か		普通	暗灰黄		
4	土師器	坏	12.9	3.6	5.7	118.4	75	下総	針	普通	橙		
5	石製品	有孔門板	孔径0.21(左右)長3.36幅4.0厚0.4重9.9										



第149図 第163号住居跡

第59表 第163号住居跡出土土物観察表 (第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	粘土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	杯	—	3.8	(7.0)	26.1	10	下総	角	普通	明黄褐	掘り方	



第150図 第163号住居跡出土土物

で十数点出土しており、いずれも被熱赤変している。

時期は出土物から、7世紀第IV四半期に位置づけられる。

第166号住居跡 (第155・156図)

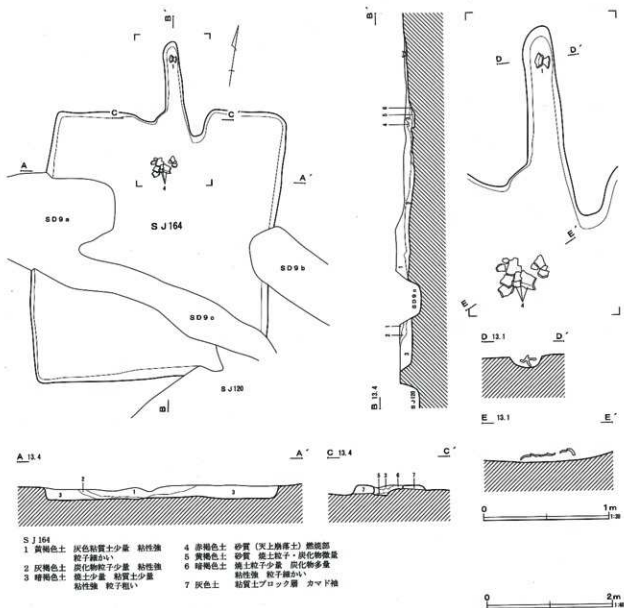
調査区西側、G・H-2グリッドに位置する。第179号住居跡と重複し、新旧関係は同住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN-7°-Wである。規模は東西軸4.46m、南北軸3.64m、

確認面からの深さ0.36mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、方位はN-4°-Eで、住居跡本体に対してやや東に振れている。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は、左袖64cm、右袖27cmで、構築土には明灰色粘質土(22層)を用いている。

燃焼部は、床面より5~10cmほど低く掘り窪められ、壁外へ10°の傾斜で上昇する。途中、煙道部とのわずかな段差が設けられるが、煙道部もこの段差を引き継ぎ、同傾斜角で外側へ上昇する。煙道部先端は煙出し穴が確認され、底面は煙道部よりも5~10cmほど低く掘り窪められる。燃焼部から煙道部先端までの長さは213cm、幅は燃焼部で53cm、煙道部先端付近で36cmである。



第151図 第164号住居跡

カマド以外の施設としては、ピットを3基確認した。いずれも床面を20cmほど掘り下げた高さで確認しており、住居跡に帰属するのか、先行するのかわからない。P1は円形で39×37cm、床面からの深さ32cm、P2は楕円形で50×40cm、床面からの深さ47cm、P3は楕円形で28×29cm、床面からの深さ36cmである。

遺物は、カマドや覆土から土師器環・甕、土玉、砥石、鉄滓などが出土している。1はカマドから出土しており底面から15cmほど浮いて出土した。また、図化していないが、覆土から鉄滓が少量出土してい

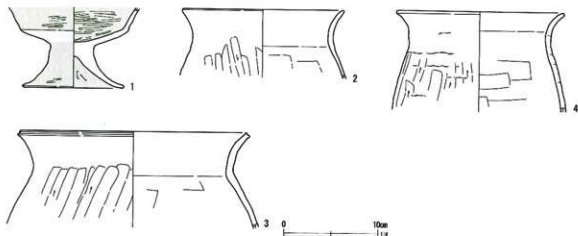
る。

住居跡の時期は、カマド出土土器から8世紀Ⅲ四半期に位置づけられる。

第169号住居跡 (第157・158図)

調査区中央部西寄り、H-2・3グリッドに位置する。第125・208・214・232・242・257号住居跡、第32号井戸跡と重複し、新旧関係は、第125号住居跡、第32号井戸跡よりも古く、その他の住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN-0°である。規模は東西軸5.35m、南北軸3.95m、確認



第152図 第164号住居跡出土遺物

第60表 第164号住居跡出土遺物観察表 (第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	-	8.3	(10.0)	315.7	65	茨西	角	普通	橙	カマド煙道部	
2	土師器	甕	(17.0)	7.3	-	174.1	10	柳西		普通	明黄褐		
3	土師器	甕	(24.3)	10.2	-	205.8	10	群東	雲、角	普通	褐灰		
4	土師器	甕	(17.4)	10.5	-	275.7	15	茨西		普通	灰黄褐	カマド前面床面	

面からの深さ0.24mである。

カマドは北壁やや東寄りに設けられる。煙道部は一部攪乱によって壊されるが、底面は全体が遺存している。方位はN-10°-Eで、住居跡本体に対して東に振れている。袖部は両側が確認されており、壁からの残存規模は、左袖74cm、右袖68cmで、構築土には明灰色粘質土(10層)が用いられている。燃焼部は壁内に取まり、底面は床面よりわずかに低い位置にあるが、掘り込みは見られない。煙道部とは10cmほどの段差を設けている。燃焼部の規模は、奥行き57cm、幅42cmである。煙道部は底面がほぼ水平で、壁外に126cm延びる。煙道部先端は煙出しピットが確認され、煙道部底面をわずかに掘り抜いている。燃焼部から煙道部の底面には、炭化物や灰(9層)が厚く集積する。

遺物は、カマド焚口、カマド前面、住居跡底面などから、土師器杯・甕・壺などが出土している。3は住居跡東側の床面から、逆位で出土した。焚口付近で出土した破片と接合している。

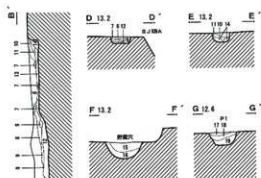
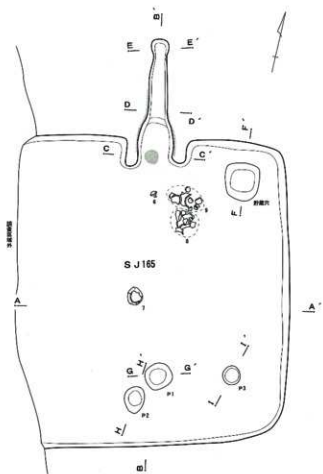
時期は出土遺物から、6世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

第171号住居跡 (第159・160図)

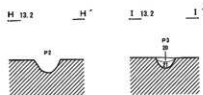
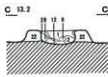
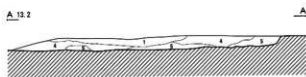
調査区西側、F-1・2グリッドに位置する。第162・191号住居跡と重複し、新旧関係は、両住居跡よりも古い。住居跡南東は第162号住居跡により遺構上部の掘削を受けるほか、住居跡南西は調査区域外におよんでおり未検出である。

平面形は東西にやや長い長方形で、主軸方向はN-14°-Eである。規模は東西軸4.72m、南北軸4.43m、確認面からの深さ0.50mである。床面は中央部を中心にはほぼ全域で貼り床が確認された。床面には炭化物が薄く集積しているほか、覆土は褐色砂質土と炭化物集積層の交互堆積である。覆土中の遺物は、この炭化物層(3・6・10層)に集中して出土する。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN-10°-Eである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は、左袖54cm、右袖48cmで、構築土には黄褐色粘質土ブロックを多量に含む灰色粘質土(30層)が用



- S J 165
- 1 黒褐色土 褐色砂質土ブロック少量
 - 2 褐色土 砂質 焼土ブロック少量 炭化物多量
 - 3 褐色土 砂質 焼土ブロック多量
 - 4 暗褐色土 シルト質 焼土粒子少量
 - 5 暗褐色土 シルト質 焼土ブロック多量
 - 6 暗褐色土 炭化物多量
 - 7 赤褐色土 シルト質 焼土ブロック多量
 - 8 暗褐色土 炭化物多量 下位に薄く炭化物堆積
 - 9 赤褐色土 シルト質 焼土ブロック少量
 - 10 褐色土 炭化物多量
 - 11 暗褐色土 砂質 焼土粒子少量 炭化物多量
 - 12 暗褐色土 しまり強
 - 13 暗褐色土 天井崩落土 煙道部
 - 14 暗褐色土 砂質 焼土粒子多量 炭化物多量
 - 15 赤褐色土 天井崩落土 煙道部
 - 16 褐色土 砂質 暗褐色土ブロック少量
 - 17 暗褐色土 灰堆積層 焼土ブロック少量
 - 18 暗褐色土 炭化物多量
 - 19 暗褐色土 炭化物少量 粘性弱 粒子粗い
 - 20 暗褐色土 炭化物少量
 - 21 暗褐色土 砂質 灰濁りや多量
 - 22 暗褐色土 砂質 焼土粒子少量
 - 23 暗褐色土 粘土質 カマド跡

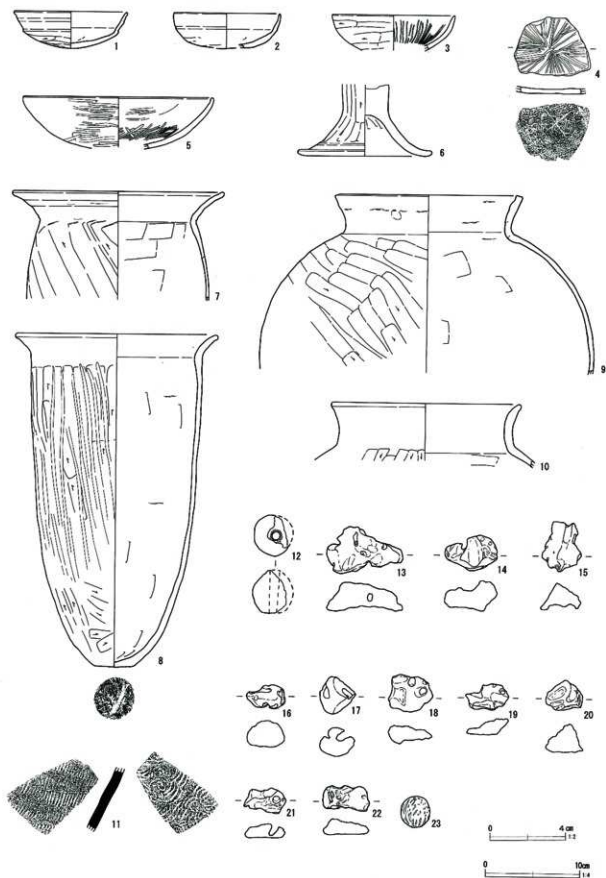


第153図 第165号住居跡

いられていた。袖部内側は非常に良く焼け、被熱赤変している。燃焼部は壁を45cmほど切り込み、底面は床面よりもわずかに低い位置にあるが、明瞭な掘り込みは見られない。煙道部とは10~15cm以上の段差を設けている。煙道部底面は3°の角度で上昇し、壁外へ101cm延びる。燃焼部と煙道部の底面には灰が集積する。

遺物は、カマド、床面および覆土から出土しており、内容としては土師器杯・甕・壺・鉢、須恵器高坏、ミニチュア土器や土玉などが見られた。

住居跡中央部の床面からやや浮いた高さで、遺物がまともって出土した。遺物には1・6・7のような土師器杯や、10・11・12・13のような土師器壺・甕、鉢などさまざまな器種が含まれている。10は土



第154图 第165号住居跡出土遺物

第61表 第165号住居跡出土遺物観察表 (第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版		
1	土師器	坏	12.0	3.9	—	68.8	40	埼玉	角	普通	にぶい橙				
2	土師器	坏	11.4	3.7	—	92.7	70	埼玉	角	普通	橙	内面黒色処理か			
3	土師器	坏	(13.0)	3.8	—	47.7	20	佐野	角、針	普通	橙				
4	土師器	坏	—	0.7	—	34.8	5	茨西		普通	褐灰	木葉痕			
5	土師器	高坏か	(20.2)	5.4	—	79.3	10	埼玉		良好	にぶい橙	漆付着か			
6	土師器	高坏	—	7.6	(12.4)	253.5	25	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙				
7	土師器	甕	22.2	11.4	—	554.5	70	埼玉	角	普通	にぶい橙				
8	土師器	甕	21.0	35.0	3.8	1359.1	80	埼玉	角	普通	にぶい黄橙		209-1		
9	土師器	甕	(18.6)	18.8	—	678.7	20	群東		普通	褐灰				
10	土師器	甕	(19.8)	6.2	—	133.1	40	茨西		普通	褐灰				
11	須恵器	甕	—	6.8	—	75.0	5		針	良好	灰				
12	土製品	土玉	径2.2口径0.5厚2.3重6.0残55						角	普通	黒				
13	貝製の鍔		長2.4幅4.0厚1.4重6.2								褐灰	12孔、被熱		238-2	
14	貝製の鍔		長1.3幅2.7厚1.6重4.2								赤	6孔、被熱		238-2	
15	貝製の鍔		長2.6幅2.1厚1.1重3.6								にぶい橙	10孔、被熱		238-2	
16	貝製の鍔		長1.2幅2.0厚1.4重1.8								にぶい黄橙	5孔、被熱		238-2	
17	貝製の鍔		長1.9幅1.9厚1.5重2.7								灰白	3孔		238-2	
18	貝製の鍔		長1.9幅2.3厚0.9重1.9								明褐灰	7孔、被熱		238-2	
19	貝製の鍔		長1.4幅2.2厚0.8重1.6								にぶい橙	6孔、被熱		238-2	
20	貝製の鍔		長1.5幅1.9厚1.5重2.4								にぶい橙	6孔、被熱		238-2	
21	貝製の鍔		長1.3幅2.1厚0.7重1.0								にぶい橙	5孔、被熱		238-2	
22	貝製の鍔		長1.3幅2.4厚0.9重1.0								橙	9孔、被熱		238-2	
23	種子		長1.65幅1.55厚1.4重1.4					100				黒	稜の突、炭化により黒色化		236-5

師器鉢で、作りは土師器甕の胴部下半の作りとよく似ている。22は土玉で住居跡西側の床面から出土している。

住居跡の時期は、出土遺物から6世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第172号住居跡 (第161・162図)

調査区西側南寄り、H-2グリッドに位置する。第208・220・232・242号住居跡、第37号土坑と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しく、第37号土坑よりも古い。

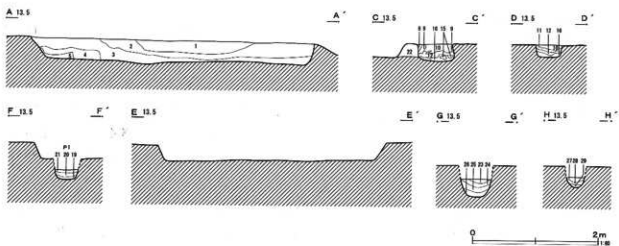
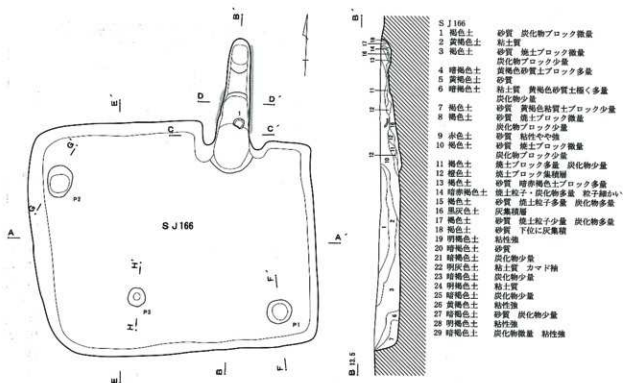
平面形は南北に長い長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。東西軸4.02m、南北軸4.62m、確認面からの深さ0.29mである。床面はところどころに貼り床が確認されたが、カマド周辺は硬化が特に著しい。

カマドは北壁やや西寄りに設けられる。カマドは構築当初(古段階)と、造り直し(新段階)の2面が確認された。

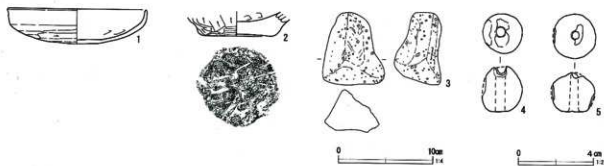
第161図平面で示したのは新段階で、袖部は両側で確認されている。壁からの残存規模は、左袖57cm、右袖30cmで、構築土には砂を多く含む黄褐色粘質土(13層)が用いられていた。右袖は古段階の燃焼部に集積した灰層の上に設けられており、同段階の袖部を取り壊し、内側に移設している。左袖は古段階の痕跡がなく、造り直しは無いのかもしれない。

新段階の燃焼部は、古段階の燃焼部の上に造られている。新段階の底面は、床面とほぼ同じ高さであり、掘り込みは見られない。煙道部とは5cmほどの緩やかな傾斜を設けている。燃焼部の幅は29cmである。古段階の燃焼部は、点線で図示した範囲で、床面を10cmほど低く掘り窪め摺鉢状となる。灰が厚く集積し(16層)、煙道部とは15cmほどの明瞭な段差を設ける。この段階の燃焼部規模は、奥行き74cm、幅40cmである。

煙道部底面はほぼ水平に掘り込まれる。断面観察でも段階分けはできず、両段階での造り直しもなけ



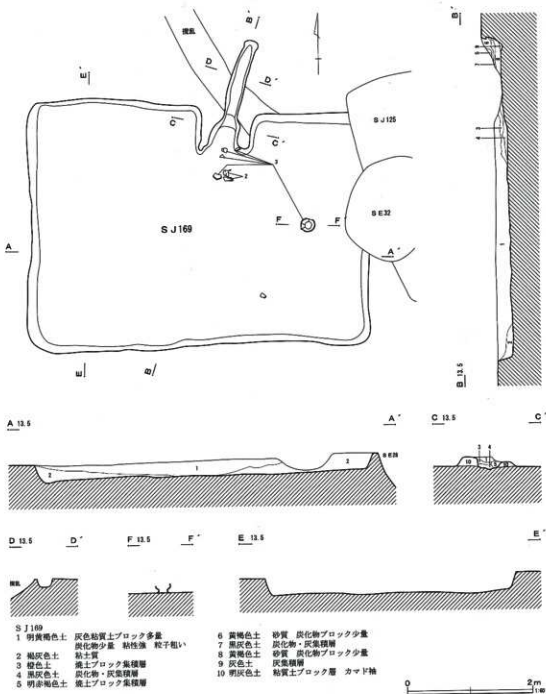
第155図 第166号住居跡



第156図 第166号住居跡出土遺物

第62表 第166号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

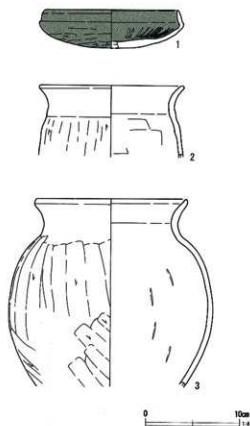
番号	種別	容積	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.8	4.7	—	143.2	75	埴北	針	良好	にぶい黄橙	カマド	
2	土師器	壺	—	1.8	8.0	250.1	5	埴南		普通	浅黄橙	木炭痕	
3	石製品	砥石	長7.6厚6.5厚4.5重207.6				100				明黄褐		235-1
4	土製品	土玉	径2.1孔径0.5厚2.4重9.8				95		角	普通	黒褐		233-1
5	土製品	土玉	径2.3孔径0.4厚2.1重10.4				95		角	普通	にぶい黄褐		233-2



第157図 第169号住居跡

第63表 第169号住居跡出土遺物観察表 (158図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.2)	4.0	—	74.2	30	埴北	角、針	良好	黒褐色		
2	土師器	甕	(15.2)	7.6	—	126.9	15	埴北	雲	普通	褐色		
3	土師器	甕	16.0	19.8	—	992.9	45	茨西	雲	普通	にぶい黄褐色	カマド焚口付近	



第158図 第169号住居跡出土遺物

れば、土層の堆積もさほど進行しなかったようである。煙道部は壁外へ160cm延び、煙出し穴に接続する。煙出し穴は直径19cmで、周辺は非常に良く被熱し、円環状に赤変している。掘り込みはほぼ垂直で、手前側は崩落していた(8層)。

遺物は、カマドや床面、覆土から、土師器甕・壺・鉢・手捏、紡錘車、須恵器甕や貝塚穴痕泥岩などが出土した。3は土師器甕でカマドから出土している。1は土師器甕または鉢の破片で、住居跡西側で出土している。

カマド出土遺物である3は、6世紀後半頃のものであるが、6世紀Ⅲ四半期とした第208・232号住

居跡よりも新しいことから、住居跡の時期はこれ以降と思われる。

第173号住居跡 (第163・164図)

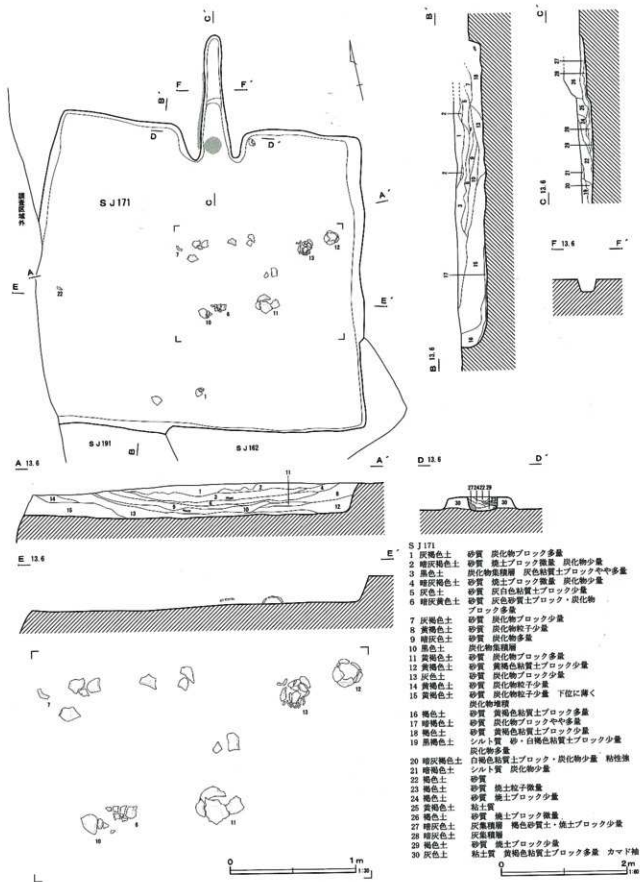
調査区中央部、G・H-4・5グリッドに位置する。第107・109・120・164・190・238号住居跡、第9a~c号溝跡、第33号井戸跡と重複しており、第107号住居跡との新旧関係は不明であるが、第109・238号住居跡よりも新しく、その他のすべての遺構よりも古い。第33号井戸跡にカマドを大きく壊されるほか、第120・164号住居跡や第9b・9c号溝跡に遺構上部を、また、第9a号溝跡に床面の一部を壊されている。

平面形は東西にやや長い長方形で、主軸方向はN-15°-Wである。規模は東西軸5.43m、南北軸5.13m、確認面からの深さ0.30mである。

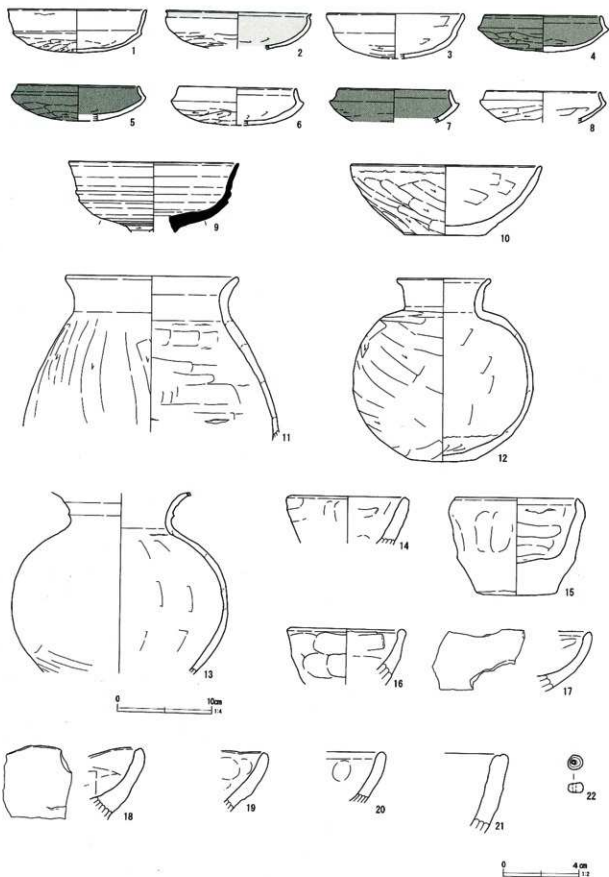
カマドは北壁中央に設けられる。先述のように、各所を他遺構に壊されており、確認されたのは袖部と燃焼部の手前側と、煙道部の先端である。袖部は両側が確認され、左軸は先端しか残らない。壁からの残存規模は、推測で左袖96cm、右袖71cmである。

燃焼部は床面より5cmほど低く掘り窪められる。煙道部底面とは15cmほどの比高差があることから、段差を設けていたものと思われる。煙道部は天井が崩落していたが、煙出し穴は確認面において、直径25cmほどの円環状被熱部として検出された。煙出し穴は、煙道部天井と接続する箇所が崩落していたが(4・6層)、ほぼ垂直に掘られている様子が観察された。燃焼部から煙道部先端までの規模は250cmである。

遺物は、住居跡中央部の床面およびこれよりやや高い位置で、1の土師器坏や2・3・4などの土師器甕がまとめて出土した。



第159図 第171号住居跡



第160图 第171号住居跡出土遺物

第64表 第171号住居跡出土遺物観察表 (第160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.8)	4.6	—	88.8	45	群東		普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理か	
2	土師器	坏	(15.6)	3.9	—	89.9	50	比企	針	良好	橙		
3	土師器	坏	(14.6)	4.7	—	70.5	20	茨西		普通	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	(12.4)	3.8	—	125.0	50	橋南	針	良好	黒		166-9
5	土師器	坏	(12.8)	3.7	—	64.6	25	埼玉北		良好	黒	カマド	
6	土師器	坏	(12.4)	4.0	—	68.4	20	橋南		良好	灰黄褐		
7	土師器	坏	(11.8)	3.5	—	49.5	15	橋南		良好	褐灰		
8	土師器	坏	(12.0)	3.3	—	34.9	20	埼玉北	針	良好	橙		
9	須恵器	高坏	(18.0)	7.4	—	179.1	30	鳩山		普通	灰		166-10
10	土師器	鉢	20.2	7.4	8.4	576.6	65	橋南	針	普通	灰黄褐		185-5
11	土師器	甕	(18.4)	16.3	—	893.9	30	茨西	雲	普通	明黄褐		
12	土師器	壺	(9.6)	19.3	5.8	1024.1	70	群東		普通	橙		185-6
13	土師器	壺	—	19.2	—	1216.4	35	群東	雲、針	普通	浅黄		186-1
14	土製品	ミニチュア	(6.0)	2.5	—	8.4	15		雲、針	普通	灰黄		
15	土製品	ミニチュア	6.5	5.2	3.9	125.5	80		角、針	普通	にぶい橙	黒斑	167-1
16	土製品	ミニチュア	(6.0)	2.9	—	12.8	25		雲	普通	にぶい黄橙		
17	土製品	ミニチュア	—	3.8	—	19.4	30		角、針	普通	にぶい黄橙		
18	土製品	ミニチュア	—	3.2	—	11.5	15		角、針	普通	にぶい黄橙		
19	土製品	ミニチュア	—	3.3	—	11.6	20		雲、針	普通	褐灰		
20	土製品	ミニチュア	—	2.7	—	6.9	15		雲	普通	灰褐		
21	土製品	ミニチュア	—	4.2	—	16.3	5		雲	普通	褐灰		
22	土製品	土玉	径0.8孔径0.2厚0.5重0.3残100							普通	黒		234-1

時期は6世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第174号住居跡 (第165~168図)

調査区西側、G-1・2グリッドに位置する。第177・179・182・184・185・192・207号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。第177号住居跡は、本住居跡と主軸方向や規模が近似しており、東壁および南壁が一致する。出土遺物からみた時期差もほとんどなく、カマドも確認されていないことから、同住居跡は建て直し前の住居跡で、カマドは本住居跡と共有していた可能性がある。

平面形は方形で、主軸方向はN-0°である。規模は東西軸4.70m、南北軸4.92m、確認面からの深さは0.52mである。床面は中央から西側にかけて貼り床が施され、直上に炭化物が薄く堆積する。

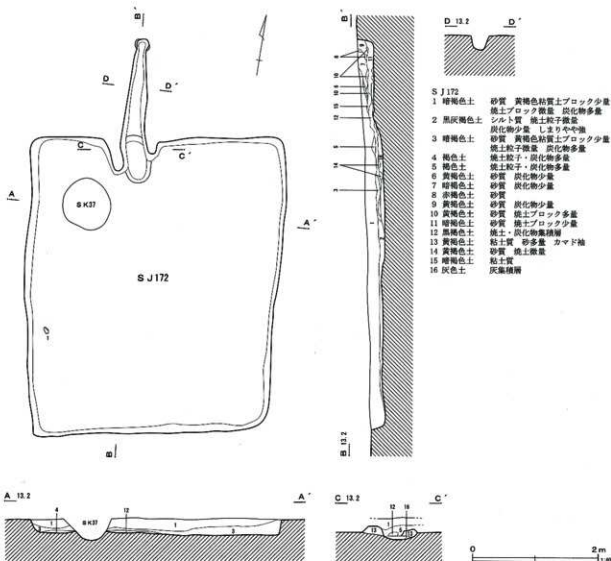
カマドは北壁中央に設けられる。袖部は両側で確認され、ともに先端には土師器甕(11・14)を倒立させ、補強材としていた。補強材据えつけに当たっては、付近をわずかに掘り窺め、そこへ土器を設置

する。補強材にはほぼ完形の甕が、また、構築土には灰色粘質土(18層)が用いられている。カマド機能時の補強材は、北側半分は袖構築土によって器面が覆われるが、内側、前面、外側半分は器面が露出していた。この事実は燃焼部内の灰(14層)が補強材に接していることからもうかがえる。

燃焼部は床面よりも低い位置にあるが、明確な掘り込みは伴わず、床面が燃焼部へ向かって非常に緩やかに下がっている。煙道部とは10cmほどの明瞭な段差を設けている。この段差が北壁を35cmほど切り込んだ、第177号住居跡北壁に一致するのは、建て替え前の第177号住居跡とカマドを共有していたことによるのかもしれない。

補強材を含めた、袖部の壁からの残存規模は、左袖33cm、右袖47cmで、燃焼部幅41cm、焚口幅は43cmである。煙道部は比較的急で、14°の傾斜をもって壁外へ140cm延びる。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴と柱穴、ビツ



第161図 第172号住居跡

トが確認された。貯蔵穴は、北東コーナーで検出され、平面形は円形で95×91cm、床面からの深さ20cmである。

P1～4は柱穴で、確認面で検出できず、床面から15～20cmほど掘り下げた段階で確認した。

P1は長円形で41×30cm、床面からの深さ44cm、P2は円形で32×30cm、床面からの深さ29cm、P3は円形で30×29cm、床面からの深さ38cm、P4は円形で42×39cm、床面からの深さ55cmである。

その他のピットは2基確認された。P5はP1と重複しており、新旧関係は同ピットよりも新しい。覆土からは口縁から胴部上半までの土師器甕(16)が出土している。平面形および規模は、円形で37×

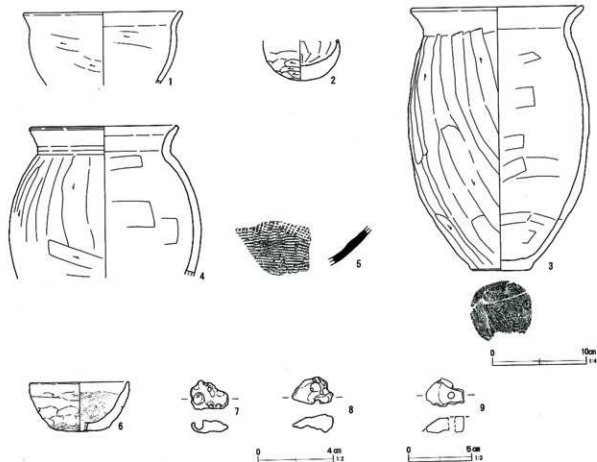
35cm、深さ13cmである。P6は楕円形で136×69cm、床面からの深さ12cmである。

遺物は、カマド袖補強材として11・14などの土師器甕が出土したほか、住居跡の北側やピット内で土師器坏・甕、須恵器坏・高坏・甕や、土玉、石製模造品、鉄製品、鉄滓などが出土した。11・14はそれぞれ右袖、左袖の補強材である。また、17の須恵器坏蓋と18の須恵器甕は、ともに6世紀前半頃の土器で混入の可能性がある。

住居跡の時期は、出土遺物から7世紀第IV四半期に位置づけられる。

第175号住居跡 (第169・170図)

調査区中央、G-4・5グリッドに位置する。第



第162図 第172号住居跡出土遺物

第65表 第172号住居跡出土遺物観察表 (第162図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	飯か	(16.6)	7.7	—	192.3	15	群東		普通	灰黄褐		
2	土師器	碗か	(8.1)	4.2	—	120.2	80	佐野	針	良好	にぶい黄橙		
3	土師器	壺	(18.0)	27.7	5.7	1320.3	40	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙		209-2
4	土師器	壺	15.6	16.0	—	568.7	25	茨西		普通	明黄褐		
5	須志器	壺	—	4.1	—	50.0	5	新治		普通	灰		
6	土師器	手型	(10.4)	5.2	—	84.9	40		角	普通	にぶい赤褐		
7	貝製刀頭		長1.6幅1.9厚0.7重0.9								淡赤橙	5孔、被熱	238-2
8	貝製刀頭		長1.3幅2.1厚1.0重1.1								にぶい橙	6孔、被熱	238-2
9	土製品	紡錘車	径(2.9)孔径0.5厚(1.2)重5.4						針	普通	灰褐		236-1

190・193・197号住居跡と重複し、新旧関係は第190号住居跡よりも古く、第193・197号住居跡よりも新しい。

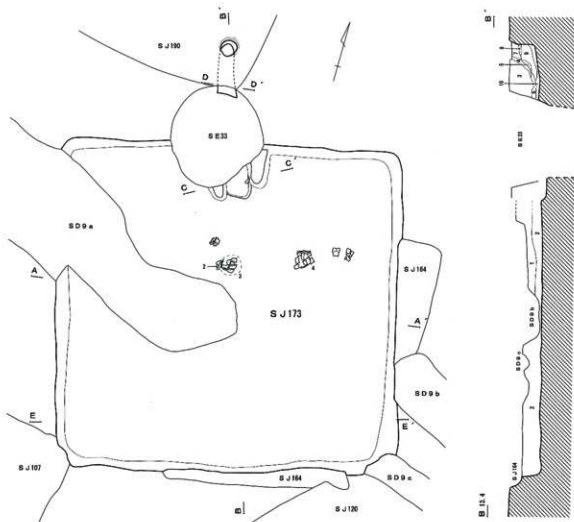
平面形は方形で、北東コーナーは角が取れやや内側に巡る。規模は東西軸4.38m、短軸4.21m、確認面からの深さ0.39mである。床面は残存部のほぼ全

域に貼り床が見られる。

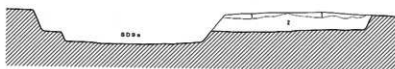
遺物は、ピットおよび覆土から土師器杯・壺、土錘が出土している。2はピット底面から出土した土師器壺で、胴部下半を欠いている。

出土物から、時期は6世紀第II四半期である。

第176号住居跡 (第171・172図)



A 13.4

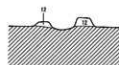


E 13.4



A'

C 13.4



D 13.4



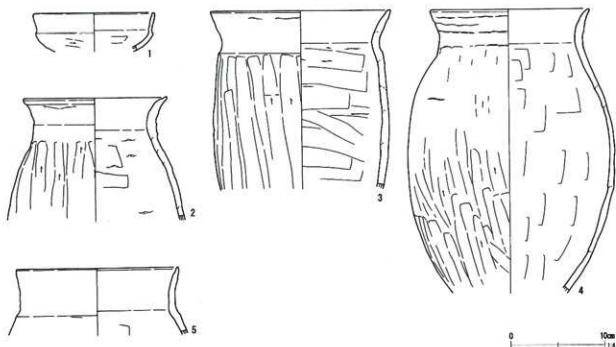
S J 173

- 1 暗灰色土 粘土質 炭化物少量
- 2 青灰色土 粘土質 黄褐色粘質土ブロック多量
- 3 灰黄褐色土 砂質
- 4 赤色土 膠出し
- 5 灰褐色土 灰塵積層 焼土粒子散量
- 6 赤褐色土 焼土ブロック集積層 粘性やや強

- 7 暗灰褐色土 灰少量 焼土ブロック多量
- 8 灰褐色土 焼土ブロック多量
- 9 灰黄褐色土 焼土ブロック少量 粘性やや強
- 10 灰色土 灰塵積層
- 11 暗赤褐色土 砂質 下に薄く灰塵積層堆積
- 12 灰色土 粘質土ブロック層 カマド軸

0 2m
1m

第163図 第173号住居跡



第164図 第173号住居跡出土遺物

第66表 第173号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	坏	(12.6)	4.1	-	68.2	20	群東	雲、角、針	普通	橙	被熱	167-2	
2	土師器	甕	17.4	13.0	-	412.4	15	茨西	普通	普通	灰褐			
3	土師器	甕	(19.0)	18.9	-	1072.0	15	茨西	針	普通	橙			186-2
4	土師器	甕	16.7	30.0	-	1551.4	75	茨西	雲、角、針	普通	橙			209-3
5	土師器	甕	(17.2)	6.9	-	123.4	5	茨西	普通	普通	橙			

調査区中央、G-3・4、H-3・4グリッドに位置する。第104・130・190・193号住居跡、第9a号溝跡、第35号井戸跡と重複し、第193号住居跡よりも新しく、その他の遺構よりも古い。第9a号溝跡にカマドおよび床面の一部を壊されるほか、遺構上部の各所を他遺構に壊されている。

残存部分で推定する平面形は正方形に近く、推定規模は東西軸7.02m、南北軸6.46mである。床面はところどころに貼り床が見られる。

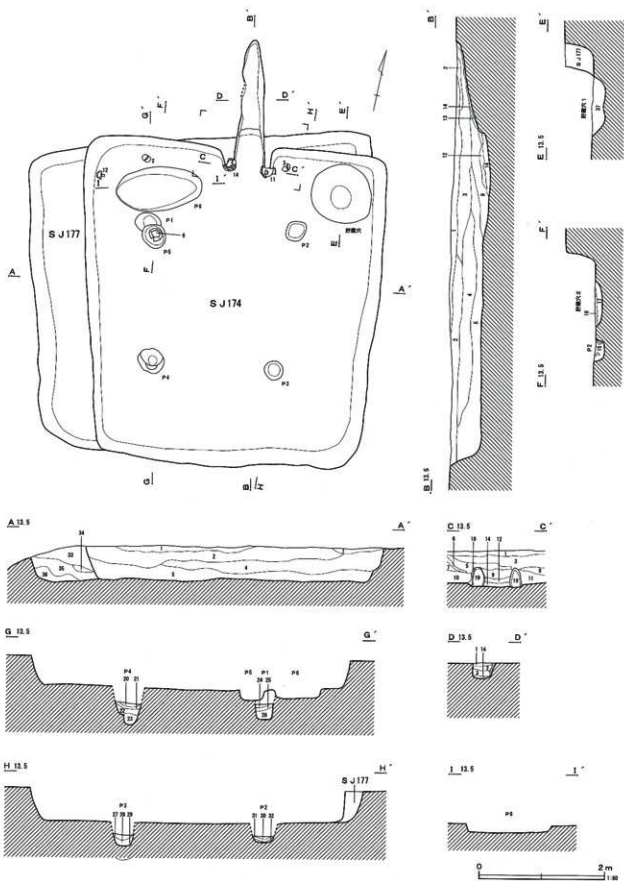
カマドは検出されておらず、これ以外の施設としては、ピットが1基検出されている。P1は円形で22×20cm、床面からの深さ9cmである。

遺物は、覆土から土師器甕、須恵器甕などが出土している。時期は7世紀第I四半期と思われる。

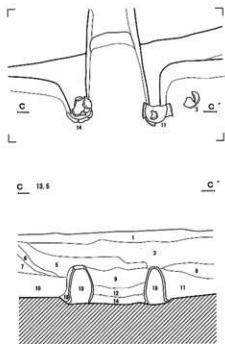
第177号住居跡 (第165図)

調査区西側、G-1・2グリッドに位置する。第174・179・182・184・185・192・207号住居跡と重複し、新旧関係は、第174号住居跡よりも古く、その他の住居跡よりも新しい。第174号住居跡には住居跡の大半を壊されているため、平面形は不明である。住居跡三方のコーナーが確認されており、これによればその規模は、東西軸5.40m、南北軸4.65mである。主軸方向は、西壁と北壁を基準にすると、N-13°-Wである。床面は第174号住居跡と同じか、わずかに高い位置にある。

先述のように、カマドは確認されていないが、本住居跡を立て替えた後、第174号住居跡のカマドとして機能した可能性がある。



第165图 第174·177号住居跡



S J 174・177

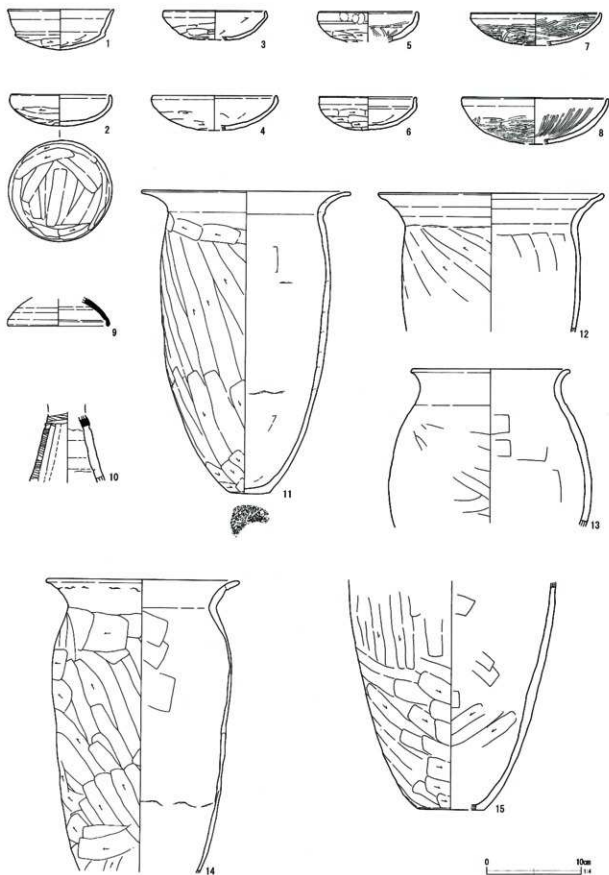
- 1 黄褐色土 炭化物少量
- 2 黄褐色土 シルト質
- 3 褐色土 焼土粒子・炭化物少量
- 4 黄褐色土 焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色土 焼土粒子微量 炭化物多量 粘性強
- 6 明黄褐色土 砂質
- 7 暗褐色土 シルト質 焼土ブロック・炭化物ブロックやや多量
- 8 黄褐色土 砂質 焼土粒子微量 炭化物粒子微量
- 9 暗褐色土 シルト質 焼土・炭化物多量
- 10 黄褐色土 砂質 焼土ブロック少量 炭化物ブロック多量
- 11 黄褐色土 砂質 粘性やや強
- 12 暗褐色土 炭化物少量
- 13 褐色土 焼土ブロック集積層
- 14 暗灰色土 灰層積層
- 15 灰色土 焼土ブロック・炭化物集積層
- 16 暗褐色土 炭化物集積層 灰子混い
- 17 暗褐色土 焼土ブロック集積層
- 18 灰色土 粘土質 カマド左袖

- 19 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物ブロック少量
- 20 暗褐色土 炭化物少量
- 21 明褐色土 炭化物微量 粘性強
- 22 暗褐色土 炭化物ブロック多量
- 23 暗褐色土 炭化物少量
- 24 暗褐色土 炭化物多量
- 25 暗褐色土 炭化物多量 粘性強
- 26 明褐色土 炭化物微量 粘性強
- 27 暗褐色土 炭化物多量 粘性強
- 28 暗褐色土 炭化物少量
- 29 暗褐色土 炭化物微量
- 30 暗褐色土 炭化物多量
- 31 明褐色土 粘性強
- 32 暗褐色土 炭化物少量
- 33 黄褐色土 シルト質 焼土粒子・炭化物少量
- 34 暗褐色土 砂質 焼土粒子微量 炭化物多量 粘性強
- 35 褐色土 砂質 黄褐色粘質土ブロック多量
- 36 褐色土 砂質 黄褐色砂質土ブロックやや多量
- 37 褐色土 砂質 焼土粒子・炭化物少量 粘性強

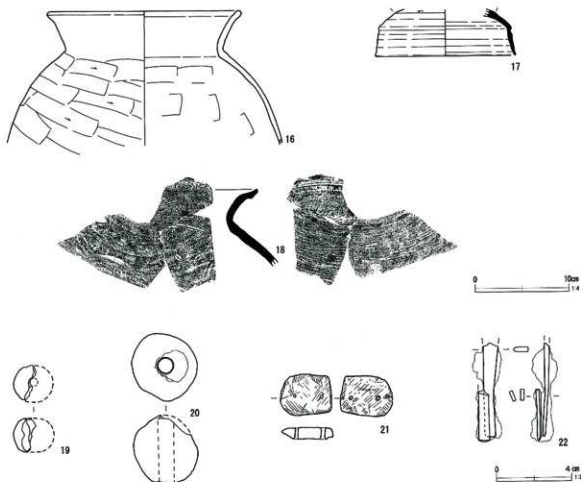
第166図 第174号住居跡カマド

第67表 第174号住居跡出土遺物観察表 (第167・168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.2)	4.3	—	73.2	45	塔北	針	普通	褐	内外面黒色処理か	167-4
2	土師器	坏	10.7	3.3	—	104.7	100	塔北	角、針	普通	橙	外面黒産	
3	土師器	坏	(10.9)	3.1	—	57.1	50	塔北	針	良好	橙		
4	土師器	坏	(13.2)	3.6	—	49.3	25	群東	角	普通	橙		
5	土師器	坏	(10.5)	3.2	—	82.2	70	茨西	針	良好	橙		167-3
6	土師器	坏	10.3	3.5	—	78.0	80	佐野	針	普通	橙		
7	土師器	坏	(14.0)	3.4	—	37.8	20	佐野	針	良好	橙	内外面赤彩か	
8	土師器	坏	(15.6)	4.9	—	76.8	25	佐野	角、針	良好	橙		
9	須恵器	蓋	(10.6)	3.0	—	14.6	10	湖西	針	良好	灰		209-4
10	須恵器	高坏	—	7.2	—	51.3	10	南北企	針	良好	褐灰		
11	土師器	甕	22.2	31.7	4.3	1588.8	95	塔北	雲、針	普通	橙	カマド右袖構材	
12	土師器	甕	(23.7)	14.6	—	103.3	10	下総	針	普通	灰黄褐		
13	土師器	甕	(16.8)	17.6	—	312.3	15	塔南	針	普通	橙		210-1
14	土師器	甕	20.6	31.1	—	1590.3	90	栃南	角、	良好	黄灰	カマド左袖構材	
15	土師器	甕	—	24.0	(7.0)	552.2	35	栃南	針	普通	灰褐	にぶい橙	
16	土師器	甕	(30.0)	14.2	—	389.3	25	群東	雲	普通	にぶい橙		
17	須恵器	蓋	(14.9)	4.9	—	43.7	15	管ノ沢	針	良好	黒褐		230-2
18	須恵器	甕	—	8.2	—	359.8	5	南北企	針	普通	灰		
19	土製品	土玉	径2.1孔径0.4厚1.8重2.2				35			普通	黄灰		
20	土製品	土玉	径3.5孔径0.9厚3.6重36.2				95		角	普通	にぶい黄		
21	石製品	有孔円板	孔径1.17(径) 0.18(厚) 径2.28孔径0.6重5.6									未製品	234-2
22	鉄製品	不明	長4.9幅0.7厚0.2重7.6									毛抜き状鉄製品か	



第167图 第174号住居跡出土遺物(1)



第168図 第174号住居跡出土遺物(2)

遺物は、覆土から土師器環・甕などが破片で出土したほか、貝塚穴痕泥岩などが出土している。出土遺物の時期は7世紀末から8世紀第I 四半期頃のものであるが、7世紀第IV 四半期の第174号住居跡に切られていることから、住居跡の時期はこれより古いものと思われる。

第179号住居跡(第173・174図)

調査区西側、G-2グリッドに位置する。第163・166・174・177・233号住居跡と重複し、いずれの住居跡にも切られている。

平面形はほぼ正方形で、規模は長軸5.26m、短軸4.70m、確認面からの深さは0.42mを測る。住居跡の主軸方向は、N-35°-Eを指す。

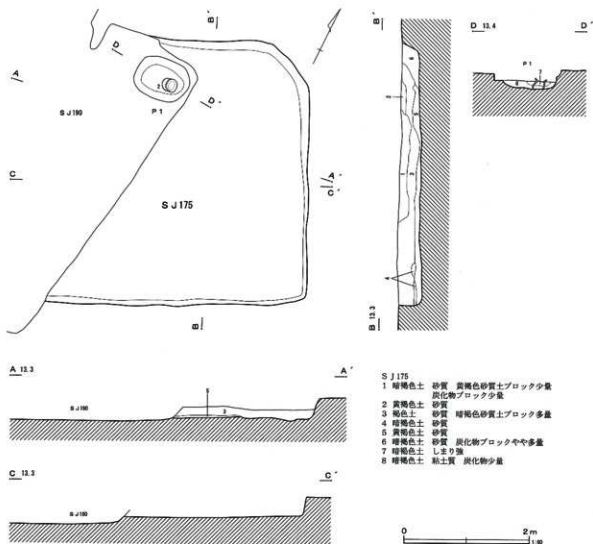
カマドは北壁西寄りに設けられ、方位はN-18°-Eを指す。住居本体とは、若干方位が異なってい

る。袖部は失われていた。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、幅55cm、床面からの深さ4cm、煙道部は長さ195cm、確認面からの深さ11cmである。壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。燃焼部～煙道部の、底面の傾斜は緩やかである。

カマド以外の施設としては、ピットが6基確認されている。いずれも床から7～17cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は円形で規模は径45×40cm、床面からの深さ20cm、P2は円形で径50×44cm、床面からの深さ35cm、P3は円形で径30×26cm、床面からの深さ21cm、P4は円形で径42cm、床面からの深さ24cm、P5は楕円形で径43×30cm、床面からの深さ28cm、P6は円形で径43×35cm、床面からの深さ22cmを測る。

カマド以外の施設は、検出されなかった。



第169図 第175号住居跡

図化し得た遺物は、土師器坏1点のみであった。

遺物の時期は、6世紀代と考えられる。

第180号住居跡 (第175・176図)

調査区南側、I-3、J-2・3グリッドに位置する。南西コーナーは調査区外に続いている。第202・218・224・236・239号住居跡を切り、第194・219号住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は長軸4.82m、短軸4.62m、確認面からの深さ0.12mを測る。主軸方向はN-6°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、煙道部～煙出し部にかけて、カマド掘方に地山土混じりの灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この充填された粘質土は、煙道部を囲むように幅4

～8cm程の規模で巡らされていた。但し、掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。

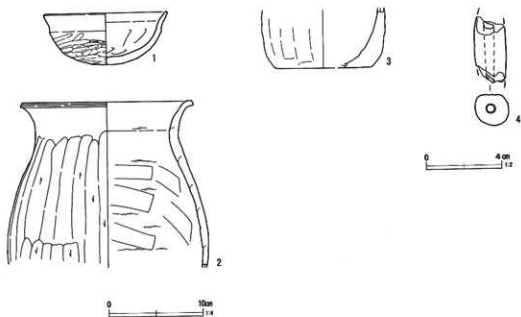
燃焼部は、床面よりも7cm程掘り下げられている。煙道部底面は、燃焼部より5cm程高く、緩やかな傾斜で煙出しへと続く。燃焼部と煙道部を含めた長さは195cm、幅46cmを測る。カマド内部の、被熱による赤色硬化は比較的少ない。

カマド以外の施設は、検出されなかった。

遺物は、須恵器坏や土師器甕が出土しており、図化し得た遺物は4点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅱ四半期と考えられる。なお4は、平安時代の須恵器坏であり、混入と推測される。

第181号住居跡 (第177～180図)



第170図 第175号住居跡出土遺物

第68表 第175号住居跡出土遺物観察表 (第170図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	5.4	-	129.9	35	灰西	雲、針	良好	橙		
2	土師器	甕	18.0	17.7	-	1366.2	45	灰西	雲、角	普通	にぶい黄橙	P1	186-3
3	土製品	鉢か	-	3.1	(5.0)	15.8	20	灰西		普通	にぶい黄橙		
4	土製品	土錘	孔径0.5長(3.1)幅1.7厚1.6重8.5				80		針	普通	明赤褐		233-2

調査区南側、I-4、J-4・5グリッドに位置する。南西コーナーが失われている。第223・225・234号住居跡を切り、第183・231・235・259号住居跡、第14号溝跡に切られている。

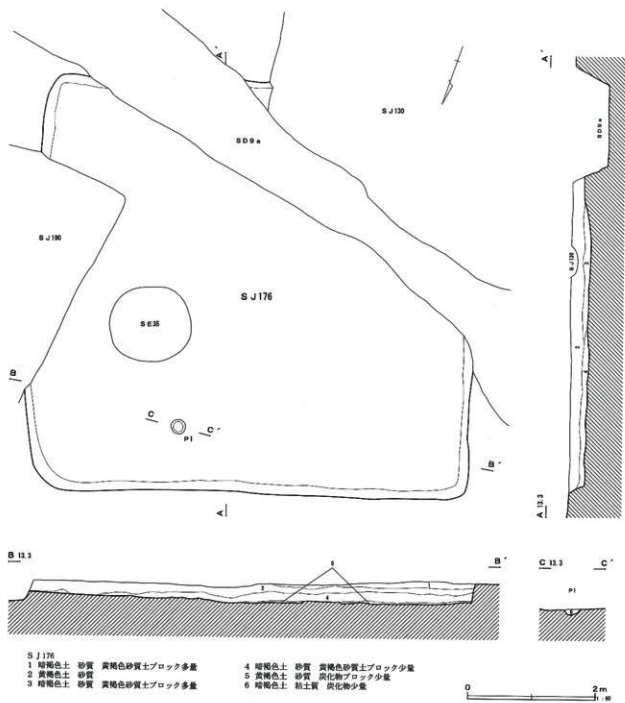
平面形は長方形で、規模は長軸7.14m、短軸5.68m、確認面からの深さ0.22mを測る。床面は比較的硬化した状態であった。住居本体の主軸方向はN-0°を指す。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN-13°-Wを指す。袖部は、両袖ともが確認され、地山土混じりの灰白色粘質土によって構築されていた。煙道部～煙出しにかけても、掘方内に地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された。この充填された粘質土は、煙道部の周囲を5～32cmの幅で巡らされているが、掘方底面での充填土の厚さは不明である（A3部分）。

袖の、住居壁面からの残存規模は、左袖65cm、右袖86cmである。燃焼部は、住居跡壁面よりも内側で収められている。長さ105cm、幅35cm、床面からの深さ9cm、煙道部は、長さ123cm、幅33cm、確認面からの深さ17cmである。燃焼部に比べ、煙道部壁面では、被熱による赤色硬化が顕著であった。カマド内の底面は、燃焼部～煙出し部へと緩やかな傾斜で上がっている。カマド燃焼部だけではなく焚口付近にも、炭化物や焼土が確認された。

カマド以外の施設としては、ピットが8基検出された。P3～P8は、床面精査の時点では確認されず、床面から23～47cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は楕円形で径70×50cm、床面からの深さ15cm、P2は楕円形で径80×57cm、床面からの深さ16cm、P3は楕円形で径60×43cm、床面からの深さ60cm、

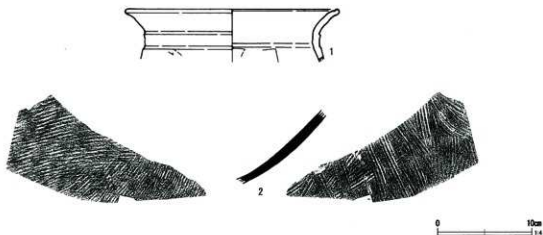


第171図 第176号住居跡

P4は円形で径55×48cm、床面からの深さ76cm、P5は円形で径44×40cm、床面からの深さ34cm、P6は円形で径44×40cm、床面からの深さ59cm、P7は円形で径42×41cm、床面からの深さ45cm、P8は円形で径25×22cm、床面からの深さ50cm、P9は円形で径69×23cm、床面からの深さ50cm、P10は楕円形で径54×47cm、床面からの深さ22cmである。

遺物は、土師器・須恵器の坏・高坏、土師器甕・瓶のほか、石製紡錘車などのほか比較的多くの遺物が検出されたが、その多くは床面から数cm～10cm程浮いた状態であった。

図化し得た遺物は比較的多く、土師器坏・甕・瓶、須恵器高坏ほか、石製品・土製品・鉄製品を含め計33点である。



第172図 第176号住居跡出土遺物

第69表 第176号住居跡出土遺物観察表 (172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(22.4)	5.6	—	132.9	10	埼玉	角	普通	橙		
2	須恵器	甕	—	7.6	—	195.1	5	湖西		普通	灰		

遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第182号住居跡 (第181・182図)

調査区西側、G-1・2グリッドに位置する。第185号住居跡を切り、第174・177・184・262号住居跡に切られている。

本住居跡の西側部分は調査区外に続き、その他の部分も多くが失われているため、平面形は不明である。住居跡の規模は、南北5.10m、東西は4.07mまでの検出である。確認面から床までの深さは0.12mである。主軸方向はN-0°を指すと思われる。

検出状況からみて、北カマドの可能性は低いと推定される。その他の施設についても、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器・甕など、合わせて3点であった。

遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第183号住居跡 (第183・184図)

調査区南側、J-4グリッドに位置する。第181・223住居跡を切り、第14号溝跡に切られている。また住居跡の南側が調査区外に続くため、平面形は判然としない。検出し得た範囲内では、逆台形を呈し

ている。

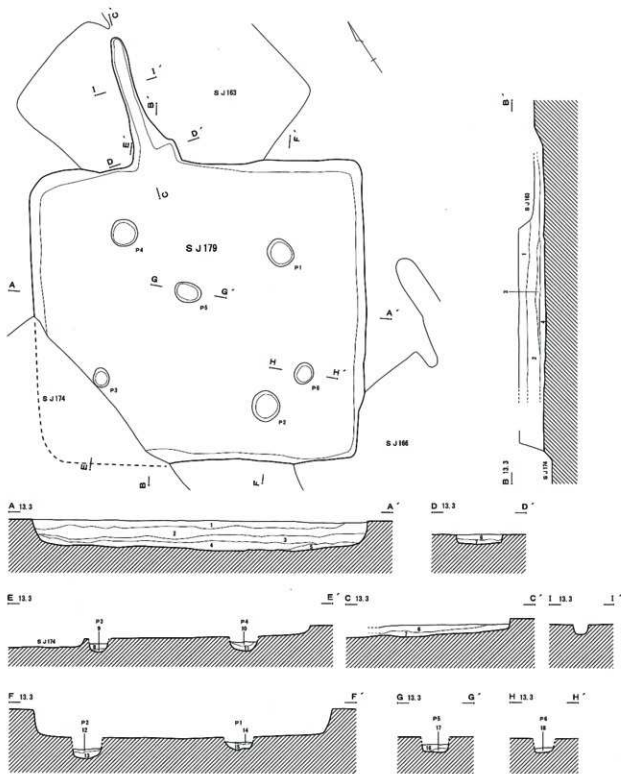
規模は東西3.16m、南北は2.15mまでの確認である。確認面からの深さは0.14mを測る。床面の硬化は、顕著ではなかった。主軸方向はN-3°-Wを指す。

カマドは北壁西寄りに設けられ、袖部は残存していなかった。焼成部は、住居跡壁面よりも奥にまで及んでいる。カマドは、焼成部と煙道部を含めた長さ168cm、幅73cm、深さは焼成部で床面から7cm、煙道部は、確認面から18cmである。焼成部と煙道部とは明瞭な境界はなく、緩やかな傾斜で煙出し部へ続く。焼成部・煙道部ともに、被熱による赤色硬化の度合いは低い。

カマド以外の施設として、ピットが1基検出された。このピットは、床面精査の時点では確認されず、床面から30cm程掘り下げた段階で検出されたものである(P1)。

P1は円形で径37×38cm、床面からの深さは48cmである。

図化し得た遺物は、土師器・甕のほか、須恵器・甕の破片など合わせて、計6点であった。



S J 179

- 1 黄褐色土 粘土質 炭化物少量 しまり強
- 2 黄褐色土 炭化物少量 粒子粗い
- 3 黄褐色土 粘土質 炭化物少量 粒子粗い
- 4 黄褐色土 粘土質
- 5 暗褐色土 粘土粒子・炭化物少量 粘性弱 粒子粗い
- 6 黄褐色土 炭化物少量 粘性強 粒子粗い

- 7 黒色土 焼土粒子少量 粘性強 粒子粗い
- 8 明褐色土 砂質
- 9 明褐色土 炭化物少量 粘性強
- 10 明褐色土 炭化物ブロック少量 粘性強
- 11 暗褐色土 砂質 炭化物微量
- 12 暗褐色土 砂質 炭化物少量

- 13 明褐色土 炭化物微量 粘性強
- 14 暗褐色土 砂質 炭化物少量
- 15 明褐色土 炭化物微量 粘性強
- 16 暗褐色土 砂質 炭化物少量
- 17 明褐色土 炭化物微量 粘性強
- 18 明褐色土 炭化物微量 粘性強

0 2m
1:10

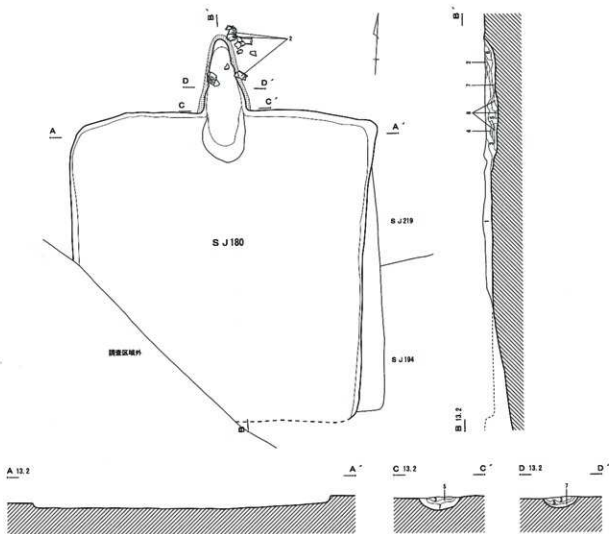
第173図 第179号住居跡

第70表 第179号住居跡出土遺物観察表 (第174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.4)	3.4	-	46.9	15		雲	良好	赤褐	カマド	



第174図 第179号住居跡出土遺物

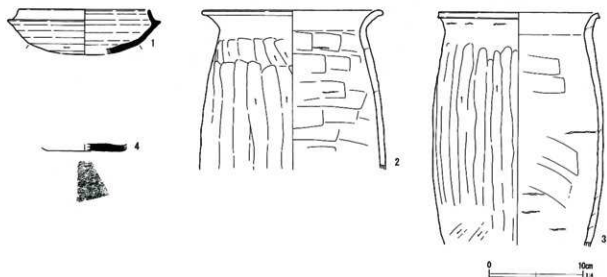


S J 180

- 1 暗褐色土 砂層 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層
- 3 暗褐色土 炭化物少量(天井崩落土) 雑草部
- 4 黒灰色土 焼土ブロック・炭化物ブロック少量

- 5 赤褐色土 焼土ブロック層の中に炭化物多量(天井崩落土) 雑草部
- 6 暗灰色土 灰層 炭化物・焼土粒やや多量
- 7 黒色土 灰層
- 8 暗褐色土 炭化物・焼土粒やや多量

第175図 第180号住居跡



第176図 第180号住居跡出土遺物

第71表 第180号住居跡出土遺物観察表 (第176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	(13.7)	4.7	—	94.1	30		針	普通	灰		
2	土師器	壺	18.6	16.9	—	806.1	35	東西	雲	普通	橙	カマド	186-4
3	土師器	壺	(17.0)	24.8	—	750.3	35	南西~東西	雲	普通	にぶい黄橙	カマド	
4	須恵器	坏	—	0.7	—	(8.0)	5	南比企	針	普通	灰オリーブ	糸切	

遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第184号住居跡 (第185・186図)

調査区西側、G-1・2グリッドに位置する。第182号住居跡を切り、第174・177・262号住居跡に切られている。

住居跡の西側約半分は、調査区外に続いているほか、南東コーナー周辺が失われているため、平面形が方形または長方形であるのかは不明である。確認できた範囲は、カマドおよび住居跡北側の一部にとどまった。住居跡の規模は、南北4.73m、東西は5.05mまでの検出であった。確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方向はN-27°-Wを指す。

カマドは北壁に設けられ、右袖部の一部分が残存していた。燃焼部は床面との高低差はなく、住居壁面より奥にまで及ぶ構造であったと推測される。煙道部は、第270号住居跡によって失われている。

貯蔵穴などの施設は、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器3点であった。

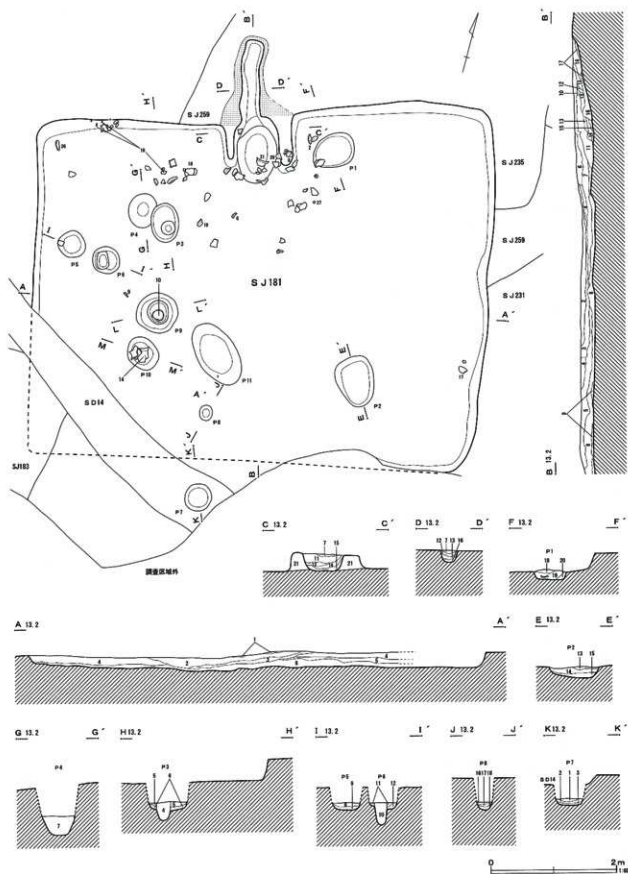
遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第185号住居跡 (第187・188図)

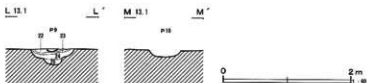
調査区西側、F・G-1・2グリッドに位置する。第162・174・177・182・184・191・262号住居跡に切られている。

失われている部分が多く、平面形は方形・長方形のいずれであるかは不明である。検出し得た範囲内では、東西4.92m、南北4.82mである。確認面からの深さは0.30mである。主軸方向は、N-0°を指す。

カマドは北壁に設けられ、方位はN-0°を指す。左袖の、壁面からの残存規模は62cmである。右袖は、基部付近のみの遺存であり、壁面からの長さは35cm程である。燃焼部は長さ98cm、幅32cm、床面からの深さ8cmで、浅い皿状を呈する。燃焼部と煙道部の境界は顕著ではなく、煙道部底面も緩やかな傾斜で



第177图 第181号住居跡(1)



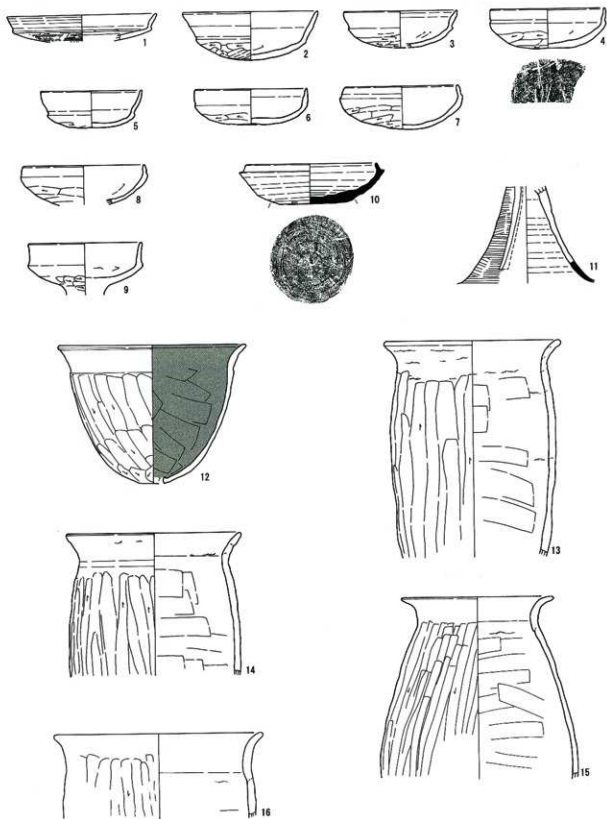
S J 181

- | | | | |
|---------|--------------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒色土 | 炭化物層 黄褐色砂ブロック少量 | 15 暗灰色土 | 砂質 粘土粒子・炭化物少量 |
| 2 黄褐色土 | 砂層 粘土粒子・炭化物粒子少量 | 16 赤褐色土 | 粘土ブロック層中に炭化物多量 |
| 3 黒色土 | 炭化物層 黄褐色砂質土ブロック少量 焼土粒子多量 | 17 黒色土 | 灰層 |
| 4 暗褐色土 | 炭化物粒子 粘土粒子少量 | 18 暗灰色土 | 炭化物少量 |
| 5 黄褐色土 | 砂層を中心に炭化物 焼土の混入量多量 | 19 灰褐色土 | 粘土ブロック・炭化物少量 |
| 6 赤褐色土 | 砂質 粘土粒子・炭化物やや多量 | 20 暗褐色土 | 粘土ブロック多量 |
| 7 赤褐色土 | 粘質土ブロック・焼土ブロック・炭化物ブロック少量 | 21 灰色土 | 粘質土ブロック層 カマド袖 |
| 8 黄褐色土 | 炭化物少量 | 22 灰褐色土 | 砂質 粘質土ブロック・炭化物少量 しまり層 |
| 9 黒色土 | 床面上に堆積した炭化物層 | 23 灰褐色土 | 粘質土ブロック少量・炭化物少量 炭化物を層状に何層も堆積 |
| 10 赤褐色土 | 粘土ブロック層 (天井崩落土) | 24 暗灰色土 | 砂質 炭化物少量 |
| 11 赤褐色土 | 灰層中に粘土ブロック・炭化物ブロックやや多量 | 25 暗灰色土 | 粘土質 炭化物少量 |
| 12 赤褐色土 | 粘土ブロック層中に炭化物多量 | | |
| 13 黄褐色土 | 粘土ブロック・炭化物ブロックやや多量 | | |
| 14 黒色土 | 灰層 | | |

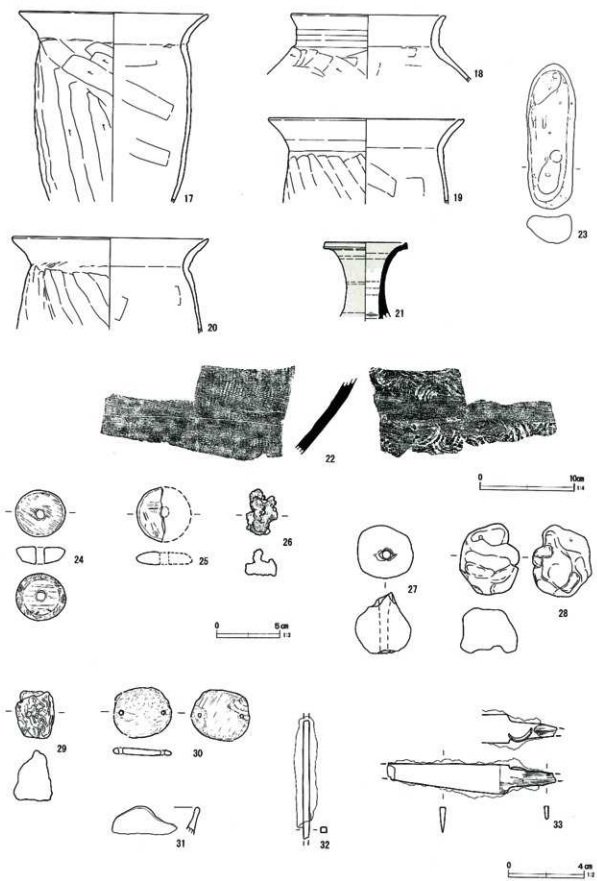
第178図 第181号住居跡 (2)

第72表 第181号住居跡出土遺物観察表 (第179・180図)

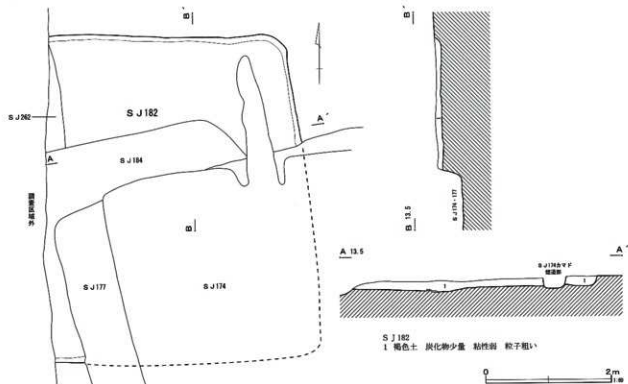
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存 (%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(16.0)	2.8	-	35.0	10	群東	雲	良好	橙		
2	土師器	坏	14.4	5.2	-	225.0	80	埼玉	雲、角	良好	橙	内外面赤彩か	167-5
3	土師器	坏	(12.2)	3.9	-	77.5	40	佐野		良好	橙	内外面黒色処理か	167-6
4	土師器	坏	(12.2)	4.2	-	81.8	40	栃南	雲	普通	橙	木製痕	
5	土師器	坏	(10.8)	3.9	-	58.8	35	栃南	針	普通	灰褐		
6	土師器	坏	12.2	3.8	-	129.0	70	栃南		普通	橙		167-7
7	土師器	坏	(12.0)	4.6	-	173.9	50	栃南		良好	灰黄	漆付着か	167-8
8	土師器	坏	(12.9)	4.2	-	111.0	75	栃南		普通	明褐色	漆付着か	167-9
9	土師器	高坏	(12.0)	5.5	-	105.2	20	西	角、針	普通	にぶい橙	貼床内	
10	須恵器	坏	13.7	4.2	-	283.8	80	佐野か		普通	灰	P9	167-10
11	須恵器	高坏	-	10.3	-	52.7	10			良好	青黒	貼床内	
12	土師器	瓶	(19.6)	14.5	2.4	324.7	65	埼玉	角、針	普通	にぶい黄橙	P1	
13	土師器	甕	(18.8)	22.8	-	553.8	15	群馬	雲、角	普通	橙	被熱	
14	土師器	甕	(18.6)	15.1	-	309.4	10	茨西	雲、角	普通	橙	P10	
15	土師器	甕	(15.0)	19.3	-	469.2	15	栃南	雲、針	普通	にぶい黄橙		
16	土師器	瓶か	(21.6)	8.2	-	180.6	5	茨西	角、針	普通	にぶい黄橙		
17	土師器	甕	(20.1)	20.1	-	243.1	15	埼玉	角、針	普通	にぶい		
18	土師器	甕	(16.4)	7.0	-	175.7	10	埼玉-群馬	雲、角	普通	にぶい橙		
19	土師器	甕	20.6	9.1	-	271.1	10	埼玉	雲、角	普通	橙		
20	土師器	甕	(21.0)	10.8	-	185.3	10	茨西	角	良好	にぶい黄橙	胴部外面漆付着	
21	須恵器	長頸壺	(8.6)	8.3	-	123.5	20	東海	針	良好	灰		
22	須恵器	甕	-	8.0	-	224.1	5			普通	灰	P2	
23	石製品	礮物石か	長15.3幅5.3厚3.1重331.4残100								灰オリーブ	チャート製	236-6
24	石製品	紡錘車	径3.9孔径0.7厚1.4重32.5残100								灰	P2	236-1
25	石製品	紡錘車	径(4.4)孔径(0.7)厚1.0重9.4残45						針	普通	にぶい黄		236-1
26	鉄滓		径3.6幅2.4厚2.0重5.1										
27	土製品	土玉	径3.0孔径0.8厚3.2重21.4残100							普通	にぶい黄		233-2
28	土製品	不明	径3.8幅3.0厚2.3重17.6残100							普通	にぶい黄褐		
29	鉄製器具		長2.5幅2.0厚2.6重7.5								灰白	12孔、被熱なしか	238-2
30	石製品	有孔円板	径2.7幅3.1厚0.4重4.9									貼床内、緑泥片岩製	234-2
31	土製品	深鉢	- 2.9 - 17.7				5			良好	にぶい赤褐	縄文	
32	鉄製品	不明	長(6.3)幅0.3×0.3重9.6									棒状製品	237-1
33	鉄製品	刀子	長(8.9)刃幅1.5背幅0.3重15.1									P2 漆付着	237-2



第179図 第181号住居跡出土遺物(1)



第180图 第181号住居跡出土遺物(2)



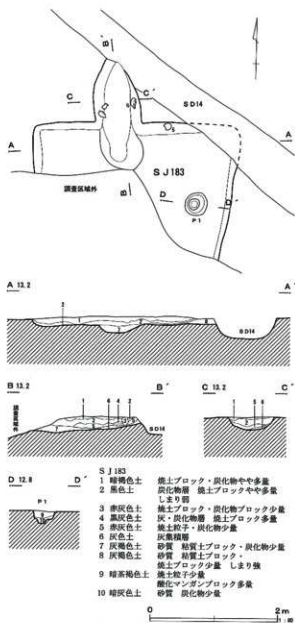
第181図 第182号住居跡



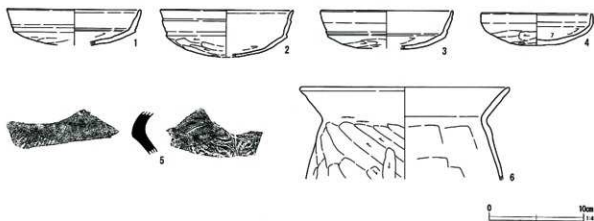
第182図 第182号住居跡出土遺物

第73表 第182号住居跡出土遺物観察表 (第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	3.8	—	26.7	10	埴北	雲	良好	黒褐色	内外面黒色処理か	
2	土師器	甕	(19.3)	7.6	—	93.3	5	埴玉-群馬	雲	普通	橙		
3	土師器	甕か	(14.7)	6.2	—	93.7	5	茨西	角、針	良好	橙		



第183図 第183号住居跡



第184図 第183号住居跡出土遺物

煙出し部へと続く。煙道部は、長さ150cm、幅28cm、確認面からの深さ10cmを測る。

カマド以外の施設としては、ビットが6基検出された。P4とP5は、床面精査の段階では検出されず、床面から18~21cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は円形で径58×52cm、床面からの深さ42cm、P2は円形で径53×46cm、床面からの深さ35cm、P3は楕円形で径75×47cm、床面からの深さ24cm、P4は円形で径57cm、床面からの深さ40cm、P5は円形で径52×48cm、床面からの深さ46cm、P6は円形で径48×45cm、床面からの深さ22cmを測る。

図化し得た遺物は、土師器坏・瓶のほか、貝巢穴 痕泥岩・石製品・土製品など、合わせて12点であった。

遺物の時期は、6世紀第IV四半期と考えられる。

第186号住居跡 (第189・190・191図)

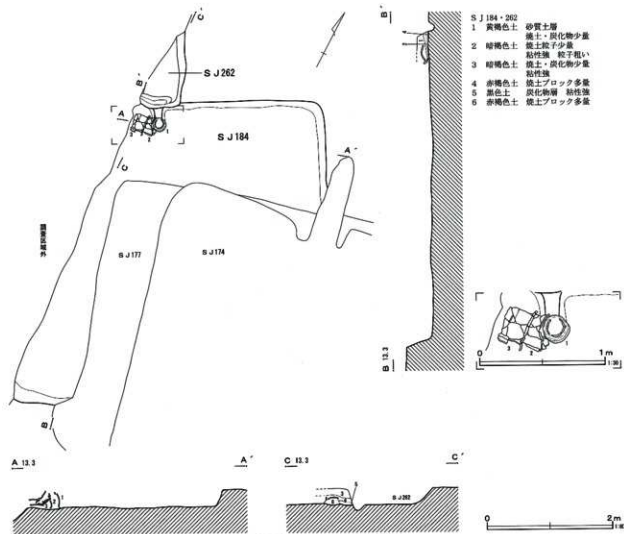
調査区南側中央寄り、H・I-3グリッドに位置する。第199・214・220・257号住居跡を切り、第200号住居跡に切られている。

平面形は方形で、規模は東西5.16m、南北4.64m、確認面からの深さ0.28mを測る。主軸方向はN-14°-Wを指す。

カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに設けられている。カマド掘方に、地山土混じりの、灰白色粘

第74表 第183号住居跡出土遺物観察表 (第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.4)	3.8	—	71.9	35	群東	角	良好	にぶい黄橙	内外面黒色処理か	168-1
2	土師器	坏	(14.2)	5.0	—	46.9	25	埼玉-群馬	普通	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(13.9)	4.0	—	105.7	50	群東	針	普通	にぶい橙		
4	土師器	坏	12.0	3.4	—	75.7	50	佐野	雲、角	普通	橙		
5	須恵器	甕	—	4.5	—	57.5	5	—	—	普通	灰	外面煤付着	
6	土師器	甕	(21.9)	9.8	—	183.1	10	茨西	雲	普通	橙		

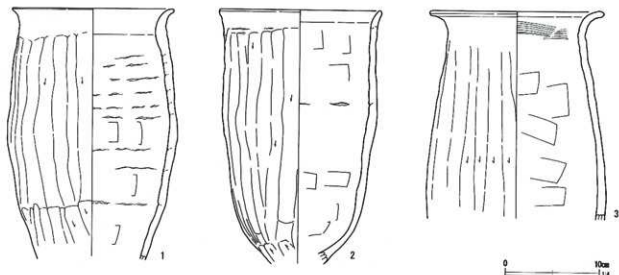


第185図 第184・262号住居跡

質土が充填されているのが確認された (アミ部分)。このカマド掘方の規模は比較的大きなもので、東西132cm、南北135cm程である。但し、掘方底面における、充填土の厚さについては不明である。

袖部は両袖ともが確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が62cm、右袖が62cmである。掛け口を中心とした天井部は失われているものの、カマドの

遺存度は比較的良好であった。焼成部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、高低差15cm程の段をもって煙道部に続く。煙道部底面には傾斜はほとんどなく、煙出し部付近では2~5cm程の窪み状を呈する。焼成部は幅38cm、床面からの深さ4cm、煙道部の長さは115cm、幅33cm、確認面からの深さ6cmである。焚き口より手前にまで焼土や炭が広がって



第186図 第184号住居跡出土遺物

第75表 第184・262号住居跡出土遺物観察表 (第186図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	16.6	26.4	—	1713.6	80	茨西	雲、針	普通	橙	カマド右袖部架材 内面輪襷裏	210-2
2	土師器	甕	16.9	26.6	—	1639.1	85	茨西	角	普通	橙	カマド焚口架構材	210-3
3	土師器	甕	17.8	21.9	—	1421.4	50	茨西	弧、角、針	普通	橙	カマド焚口架構材	210-5

たものの、カマド内の赤色硬化の度合いは低いものであった。

カマド以外の施設は、確認されなかった。

11の土師器甕は、カマド燃焼部内から出土した。

13の土師器甕は、住居跡中央やや東寄り、床面より数cm程浮いた位置から、土器片がまとまった状態で出土した。6は、大型高坏の坏部である。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕・瓶、須恵器甕のほか、手捏ね土器、石製紡錘車など、合わせて計16点であった。

遺物の時期は、6世紀第IV四半期と考えられる。

第187号住居跡 (第192・193図)

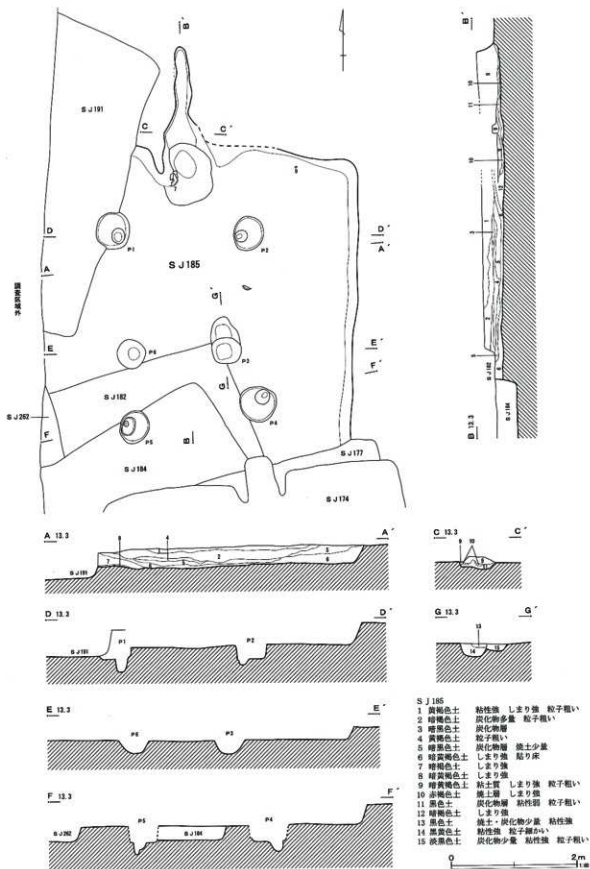
調査区南側、I-2・3グリッドに位置する。第189・203・211・220・243・250号住居跡を切り、第14号溝跡に切られている。多くの遺構と重複関係にあるものの、全体のプランを知ることができる。

平面形は方形で、規模は長軸4.50m、短軸3.90m、確認面からの深さ0.56mを測る。主軸方向はN-40°-Wを指す。

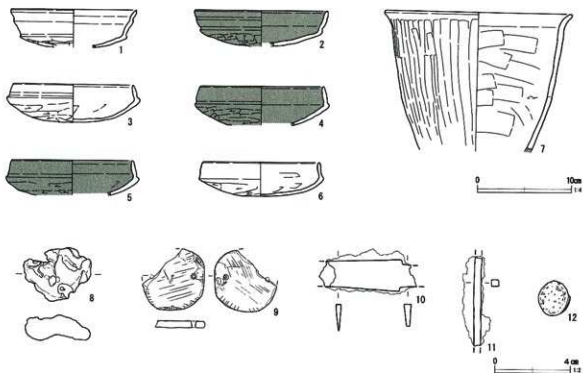
カマドは、住居北西壁に2基確認された(カマド1・2)。カマド1の掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された(アミ部分)。この充填された粘質土は、煙道部を囲むように幅8~25cm程の規模で巡らされていた。但し、掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。

カマド1は、右側の袖部が残っており、壁面からの残存規模は24cmである。燃焼部と煙道部を含めた長さ195cm、幅28cmであり、確認面からの深さ42cmを測る。カマド1の方はN-25°-Wを指す。燃焼部は、住居壁面より手前で、煙道部に移行している。床面と、燃焼部・煙道部の底面との高低差はほとんどみられない。煙出し部は急激な立ち上がりを見せ、オーバーハングしている。煙道部壁面は、被熱による赤色硬化が顕著であった。燃焼部手前にも、焼土や炭が少量分布していた。

調査時での所見として、カマド1は、先行するカマド2を廃棄し、袖部を撤去して左(西)側に新たに構築されたと思われる。但し、カマド1の右袖が、



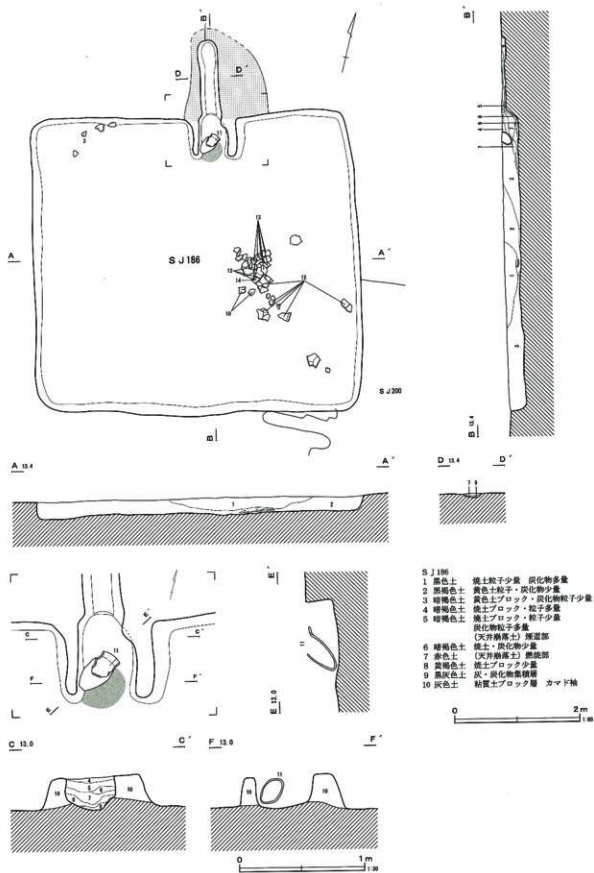
第187図 第185号住居跡



第188図 第185号住居跡出土遺物

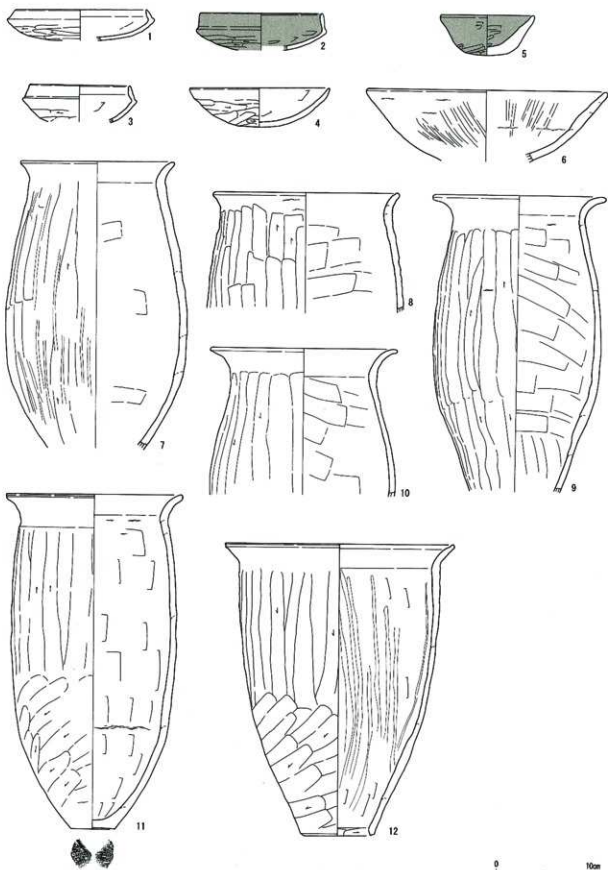
第76表 第185号住居跡出土遺物観察表 (第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.4)	4.0	-	66.1	30	埴南		良好	橙	赤影か	
2	土師器	坏	(14.2)	3.8	-	41.2	20	埴北	雲	良好	橙	カマド	
3	土師器	坏	(12.8)	4.0	-	47.9	20	埴北		良好	黒褐	内外面黒色処理か	
4	土師器	坏	(13.4)	4.1	-	40.3	20	埴北	針	良好	黒		
5	土師器	坏	(13.0)	3.7	-	32.8	15	埴北	針	良好	黒		
6	土師器	坏	12.4	3.6	-	112.7	75	埴玉	雲	普通	橙		
7	土師器	瓶	(19.6)	14.7	-	339.4	35	群東		普通	にぶい橙	カマド燃焼部 被熱強	168-2
8	貝類・貝殻		長2.7幅3.6厚1.2重5.9								灰褐	12孔、被熱弱	168-6
9	石製品	有孔円板	孔径0.23長3.2幅3.3厚0.4重7.3										238-2
10	鉄製品	刀子	長(5.2)刃幅1.6背幅0.3重14.0										234-2
11	鉄製品	不明	長(4.6)幅0.4厚0.4重4.9										237-1
12	種子		長1.85幅1.2厚1.4重1.5				95				黒	棒状 焼の実、炭化による黒色化	237-1 236-5

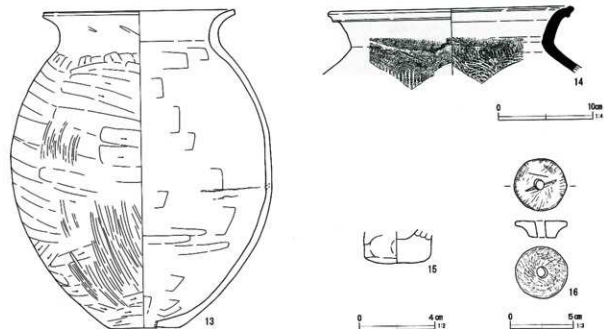


- S J 186
- 1 黒色土 焼土粒子少量 炭化物多量
 - 2 暗褐色土 黄色土粒子・炭化物少量
 - 3 暗褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子少量
 - 4 暗褐色土 焼土ブロック・粒子多量
 - 5 暗褐色土 焼土ブロック・粒子少量
炭化物粒子多量
 - 6 暗褐色土 (天井崩落土) 灰道部
 - 7 赤色土 (天井崩落土) 壁残部
 - 8 黄褐色土 焼土ブロック少量
 - 9 黒灰色土 灰・炭化物量様層
 - 10 灰色土 粘質土ブロック層 カマド軸

第189図 第186号住居跡



第190图 第186号住居跡出土遺物(1)



第191図 第186号住居跡出土遺物(2)

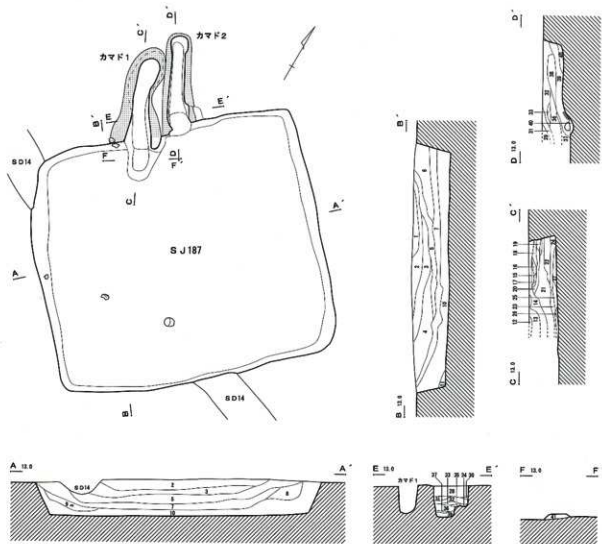
第77表 第186号住居跡出土遺物観察表(第190・191図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	3.3	-	40.9	20	群東		普通	灰褐		
2	土師器	坏	(13.0)	3.9	-	53.1	25	埜北		良好	黒褐		
3	土師器	坏	(10.8)	3.9	-	21.5	10	群東		普通	橙		
4	土師器	坏	(14.8)	14.1	-	82.0	25	橋南		普通	灰褐	内面黒色処理か	
5	土師器	手捏	(9.8)	4.3	-	99.5	35	次西	角、針	良好	黒		
6	土師器	高坏	(25.4)	7.5	-	203.9	10	橋南		普通	灰黄褐	内外面に大黒斑	168-3
7	土師器	甕	(16.0)	30.1	-	1236.9	30	次西	雲、角	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	甕	(19.4)	12.3	-	572.0	20	橋南	角	普通	橙		
9	土師器	甕	(17.8)	31.2	-	1426.3	40	下西	角、針	普通	橙		210-4
10	土師器	甕	(19.3)	15.5	-	497.1	20	次西	雲、角、針	普通	にぶい橙	カマド燃焼部	211-1
11	土師器	甕	(18.6)	35.2	4.6	1475.0	70	橋南	針	普通	にぶい黄橙		211-2
12	土師器	甕	24.2	30.9	7.8	1749.7	70	橋南		普通	にぶい黄橙		211-3
13	土師器	甕	(20.2)	34.5	(6.9)	1444.3	70	次西	雲、角	普通	浅黄		
14	須恵器	甕	(25.2)	7.0	-	1838.3	15			普通	灰		
15	土製品	手捏	-	1.7	3.4	18.9	45		雲、針	普通	オリーブ黒		236-1
16	石製品	紡錘車	径4.1孔径0.8厚1.3重26.2残100										

カマド2の左袖の可能性も否定できない。その場合、カマド2の右袖のみを撤去した可能性が考えられる。さらに、カマド2の左袖を、カマド1の右袖として再利用した、という可能性も考えられる。

カマド2は、掘方に地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された(アミ部分)。この充填された粘質土は、煙道部を囲むように、幅約10cmの規模で巡らされていた。但し、掘方底面で

の、充填土の厚さについては不明である。燃焼部と煙道部は、蒲葦状に構築されていた。カマド掘方の充填土は非常に堅固であり、調査時点において、構築された煙道部を明瞭に検出することができた。燃焼部の平面規模は、35×30cm、燃焼部と煙道部を含めた長さ155cm、確認面からの深さは33cmを測る。燃焼部底面派は浅い皿状を呈し、弱い段を経て15cm程立ち上がって、煙道部へと移行する。煙道部底面



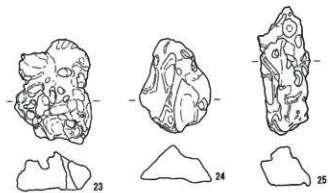
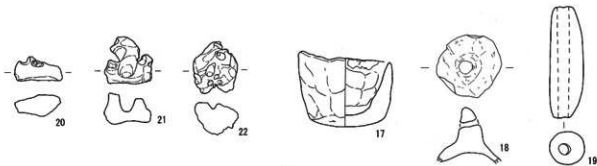
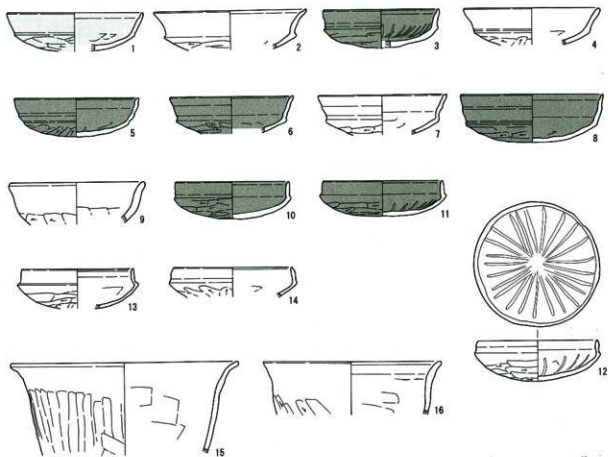
S J 187

- 1 黒褐色土 黄色土粒子やや多量 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 焼土粒子少量 炭化物粒子多量
- 3 黒色土 焼土粒子やや多量 炭化物多量
- 4 暗褐色土 黄色土粒子少量 炭化物粒子少量
- 5 黒色土 炭化物層 黄色土ブロック少量 焼土粒子多量
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 7 暗黄褐色土 炭化物粒子少量
- 8 暗褐色土
- 9 黒色土 炭化物多量
- 10 暗褐色土 炭化物粒子少量
- 11 暗黄褐色土 炭化物粒子微量
- 12 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量 住居跡覆土
- 13 暗褐色土 黄色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 住居跡覆土
- 14 暗黄褐色土 粘性強 住居跡覆土
- 15 暗褐色土 炭化物少量
- 16 赤褐色土 焼土層 (天井崩落土)
- 17 暗褐色土 炭化物多量
- 18 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物ブロックやや多量
- 19 暗赤褐色土 焼土ブロック・炭化物やや多量
- 20 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量

- 21 暗灰褐色土 黄色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 22 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量
- 23 暗灰褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子少量 (天井崩落土)
- 24 暗褐色土 粘質土ブロック多量
- 25 黒色土 炭化物層 焼土粒子少量
- 26 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 27 黒色土 炭化物層 煙道断面
- 28 暗灰褐色土 粘質土ブロックやや多量 焼土粒子少量 炭化物ブロックやや多量
- 29 黒褐色土 粘質土粒子少量 炭化物少量 カマド上からの堆積土
- 30 灰白色土 粘土ブロック層
- 31 暗褐色土 粘質土ブロック少量 炭化物ブロックやや多量
- 32 暗褐色土 粘質土ブロック少量 炭化物ブロックやや多量
- 33 暗褐色土 炭化物少量
- 34 暗褐色土 粘土ブロック・炭化物ブロック多量
- 35 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物ブロック多量
- 36 暗褐色土 焼土粒子・炭化物多量
- 37 暗褐色土 粘土ブロック・炭化物ブロックやや多量
- 38 灰褐色土 粘土粒子・炭化物少量
- 39 黒褐色土 焼土粒子・炭化物少量
- 40 黒色土 炭化物層
- 41 灰白色土 粘質土ブロック層 カマド箱



第192図 第187号住居跡



第193图 第187号住居跡出土遺物

第78表 第187号住居跡出土遺物観察表 (第193図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.4)	4.1	—	81.3	30	埼玉		普通	橙	掘り方	
2	土師器	坏	(16.2)	4.1	—	38.9	20	埼玉		普通	橙	内外面赤彩か	
3	土師器	坏	(12.4)	4.0	—	66.8	25	群東	角	良好	黒褐		
4	土師器	坏	(14.0)	3.9	—	44.8	15	埼玉	角	良好	橙	カマド	
5	土師器	坏	(13.1)	4.1	—	109.8	45	埼玉		良好	黒		
6	土師器	坏	(13.0)	3.9	—	38.7	25	埼玉		普通	黒褐		
7	土師器	坏	(13.6)	4.2	—	33.7	15	埼玉	雲	良好	灰黄	内外面黒色処理か	
8	土師器	坏	(15.2)	5.1	—	82.1	30	埼玉	角、針	普通	灰黄褐		
9	土師器	坏	(14.2)	4.4	—	59.6	15	茨西		普通	にぶい黄橙		
10	土師器	坏	(12.2)	3.9	—	69.1	35	埼玉	針	普通	黒褐		
11	土師器	坏	(12.8)	3.7	—	54.0	25	群東	角、針	良好	褐灰		
12	土師器	坏	12.6	4.2	—	161.6	90	前南	針	普通	にぶい黄橙		
13	土師器	坏	(11.8)	4.2	—	55.7	25	佐野	雲、角、針	良好	褐灰	内外面黒色処理か	168-4
14	土師器	坏	(12.6)	3.1	—	31.3	20	前南		普通	にぶい黄橙		
15	土師器	壺か	(24.0)	9.7	—	156.7	10	埼玉		普通	にぶい黄橙		
16	土師器	甌か	(17.4)	5.7	—	80.1	5	埼玉		普通	橙		
17	土製品	ミニチュア	4.8	3.6	3.3	51.2	95			普通	にぶい橙	カマド	168-5
18	土製品	不明	孔径0.1×0.2	長3.4	幅3.3	厚2.8	重10.4		雲	普通	褐灰	カマド	
19	土製品	土錘	孔径0.6	長5.9	幅1.8	厚1.8	重18.6	100	針	普通	橙	カマド	233-2
20	瓦類(瓦)		長1.2	幅2.5	厚1.1	重1.3					灰白	3孔、被熱なし	238-2
21	瓦類(瓦)		長2.4	幅2.5	厚1.6	重3.8					灰白	7孔、被熱なし	238-2
22	瓦類(瓦)		長2.5	幅2.3	厚1.6	重5.6					橙	16孔、被熱	238-2
23	瓦類(瓦)		長5.3	幅4.0	厚1.9	重19.7					淡黄	29孔、被熱弱	238-1
24	瓦類(瓦)		長5.0	幅3.7	厚1.3	重15.5					浅黄	7孔、被熱弱	238-1
25	瓦類(瓦)		長6.6	幅2.6	厚2.0	重14.5					浅黄橙	27孔、被熱弱	238-1

は水平面に近く、煙出し部分で急激に立ち上がる。燃焼部・煙道部ともに、壁面は被熱による赤色硬化が顕著であった。カマド2の方位はN-30°-Wを指す。

土師器坏・甌のほか、ミニチュア土器、土錘・貝果穴裏泥岩ほか、図化し得た遺物は計25点であった。

遺物の時期は、6世紀IV四半期と考えられる。

第188号住居跡 (第194・195図)

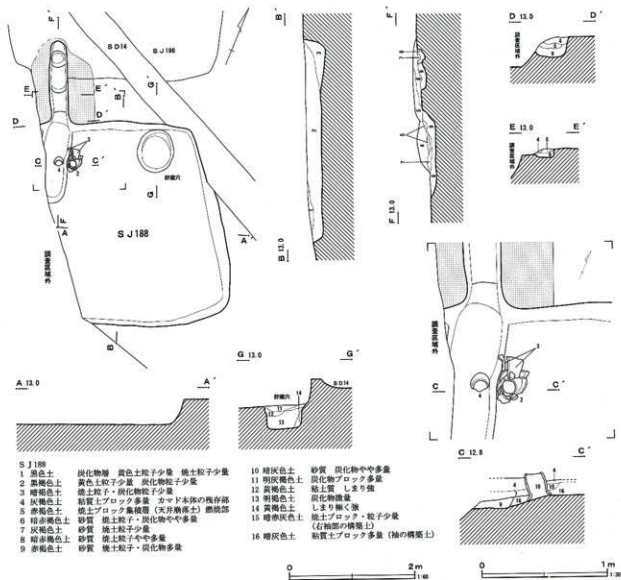
調査区南側、I-2グリッドに位置する。第189・211・220・258住居跡を切り、第196号住居跡、第14号溝跡に切られている。住居跡や溝跡に切られているものの、深度の違いから本住居跡のプランが残されており、形状・規模をおおむね確認できた。住居跡の西側は、調査区域外におよぶ。

平面形は不明であるが、検出できた範囲内では、台形に近いと推測される。遺構の規模は、南北3.20

mで、東西については2.40mまで確認できたのみである。確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方向はN-30°-Wを指す。

カマドは西壁に設けられている。掘方、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された(アミ部分)。この充填された粘質土の厚さは、煙道部右(東)側では40cm程であった。但し、掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。方位はN-22°-Wを指す。カマドの燃焼部は長さ145cm、幅35cm、床面からの深さ17cm、煙道部の長さは110cm、幅31cm、確認面からの深さ12cmを測る。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、明瞭な段を経て煙道部に至る。煙道部・煙出し部ともに深さ10cm程の窪み状を呈している。燃焼部・煙道部とも、被熱による壁面の赤色硬化は顕著であった。

カマド以外の施設としては、北東コーナーに貯蔵



第194図 第188号住居跡

第79表 第188号住居跡出土遺物観察表 (第195図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	8.7	3.6	—	106.8	80	関西	雲、角	良好	橙	木霊根	188-6
2	土師器	甕	22.2	26.1	—	1374.4	75	埼玉	雲、角、針	普通	にぶい黄橙	カマド右袖構築材	187-1
3	土師器	瓶	(29.0)	16.3	—	535.5	20	関西	針	普通	黄橙	カマド構築材か	
4	土師器	壺	15.6	12.3	—	469.5	30	埼玉	雲、角、針	普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部	
5	土製品	土玉	径2.17孔0.3厚1.9重4.2残50							普通	にぶい黄橙		233-1
6	土製品	土玉	径2.3孔0.4厚2.0重9.1残100						雲	普通	灰		233-1

穴が設けられていた。平面形は楕円形で、平面規模は66×56cm、床面からの深さ40cmを測る。

土師器2～4は、カマド構築材である。この他に、土師器坏と土玉などが出土している。

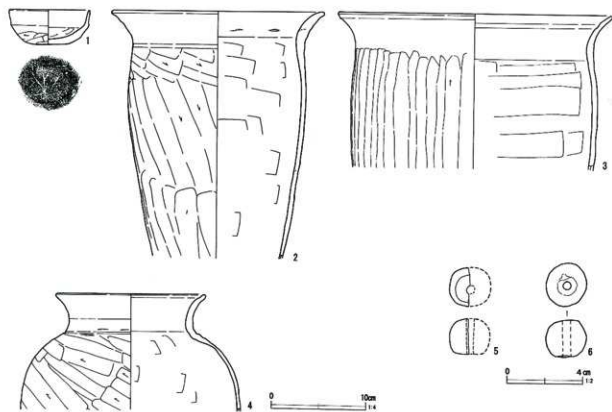
図化した遺物は、土師器坏・壺・甕のほか土玉

を合わせ、計6点であった。

遺物の時期は、7世紀第IV四半期と考えられる。

第189号住居跡 (第196・197図)

調査区南側、1-2グリッドに位置する。第243号住居跡を切り、第187・188・203・211・258号住居



第195図 第188号住居跡出土遺物

跡、第14号溝跡に切られている。なお、第203号住居跡は当初、平面的にも断面的にも識別できなかった。しかし、床面の検出時点において、地山との色調・土質の違いから、第189号住居跡の東隣に第203号住居跡を設定した。

住居プランの大半が失われているため、平面形は方形か長方形かは不明である。規模は、南北が4.03mであり、東西は3.50mまで確認できたのみである。確認面からの深さ0.15mを測る。主軸方向はN-28°-W、またはN-62°-Eを指すと推測される。

カマドおよびその他の施設は、検出されなかった。土師器環・甕・壺・甔、須恵器甕などが出土しており、図化し得た遺物は、計8点である。

遺物の時期は、5世紀第IV四半期と考えられる。

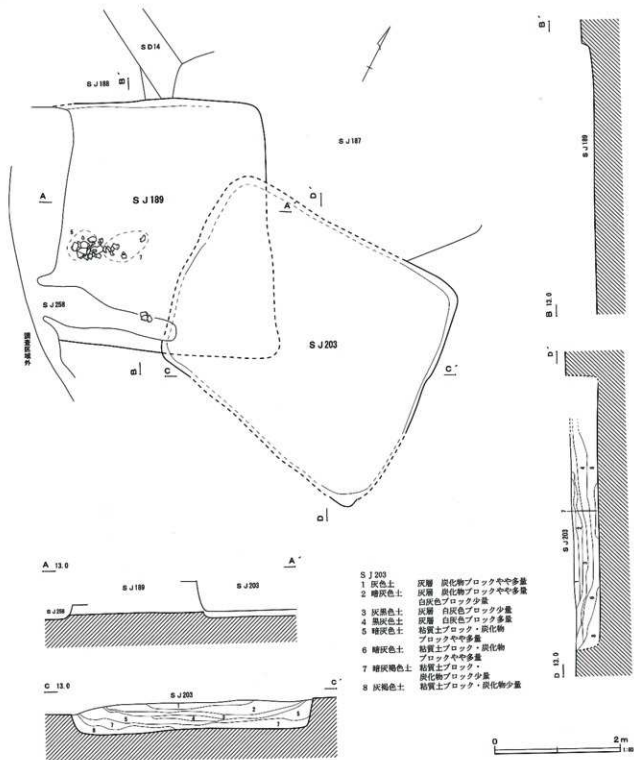
第190号住居跡 (第198図)

調査区中央部、G-4グリッドに位置する。第173・175・176・193号住居跡を切り第33号井戸跡に切

られている。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は南北5.18m、東西4.12m、確認面からの深さ0.35mを測る。主軸方向はN-7°-Eを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された(アミ部分)。この充填された粘質土は、煙道部の周囲を8~36cmの幅で巡らされているが、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。カマド方位は、N-2°-Wを指す。袖部は両袖とも確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が58cm、右袖が60cmである。燃烧部は、住居の壁面よりも奥にまで及んでおり、長さ97cm、幅30~50cm、床面からの深さ8cm、煙道部は長さ172cm、幅28cm、確認面からの深さ14cmを測る。燃烧部底面は浅い皿状を呈し、明瞭な段を経て煙道部へと続く。煙道部底面は、緩やかな傾斜で煙出し部に至



第196図 第189・203号住居跡